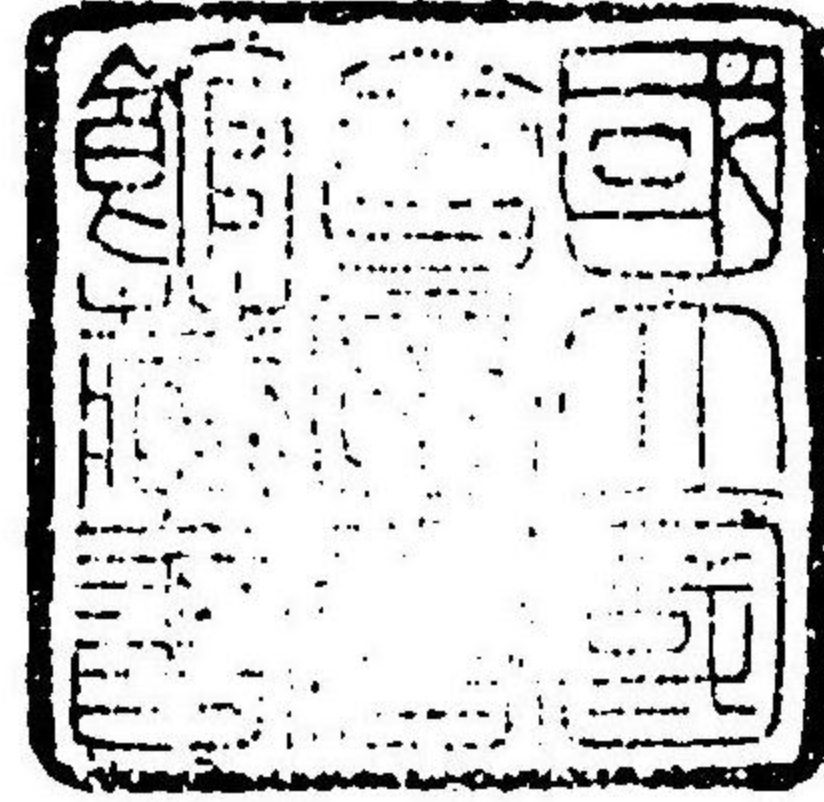
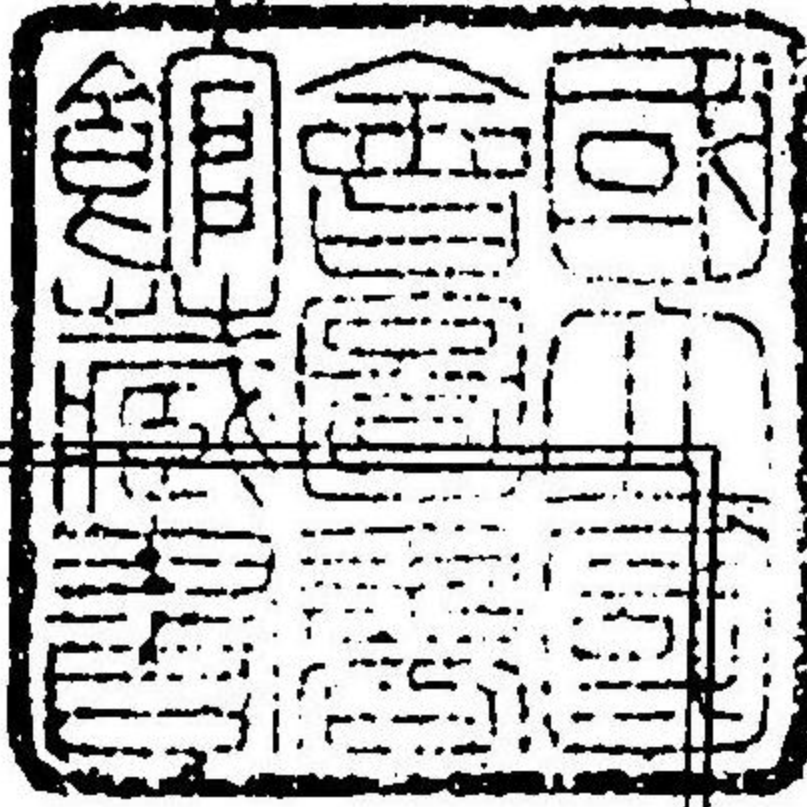


768.47a3523



淨瑠璃史序

天保年間、聲曲類纂、齋藤月岑の手に成りてより、此書につきて、よく淨瑠璃樂諸流の沿革を知るを得べく、寶曆年間に成れる、外題年鑑によれば、操興行の日附を知るを得て、此樂の起源、盛衰等、略、其要を領すべしと雖も、未だ以て、此樂と操、操と歌舞伎との關係よりして、時と地との、此樂に及せる影響を明め難し。これ固より至難の業にして、此樂に至り深からざる、余輩の如きが、望むべき處にあらずと雖も、機に觸れて、此方面の研究を企つるに至れり。

前年、文科大學國語研究室に、多くの丸本の購入せらるゝや、無慮六百餘種、未だ嘗て、世に知られざるものも少からざりき。幸にして、目錄の編纂に従事したりしも、作者の明

序



260763

ならざるあり、時代の判然せざるあり、外題の訓み難きものあり、作者各二三の異名を有する等のことありて、意外の難關に遭逢し、年を経て、漸く完了するを得たり。其後、なほ幾多の丸本に接し、普く諸書に便りて、淨瑠璃並に操の年表を編し、次て、此史の編纂に従事し、自家の臆説を交へず、一一典據によりて、概略を叙し、相合して此書を成せり。聲曲類纂の如きは、人々の多く信用する書なれども、まゝ誤謬あり、或は疎に失する處ありて、作者も悉くを載せず、興行の初日も見え、加ふるに天保以前のみに、外題年鑑、また、作者を擧るに疎なり。余は力めて年表に於て、其全からんことを求め、力の及ぶ限り、多くの書を涉獵せり。概ね其典據を掲ぐ。前半の史は、固より略史にして、樂を説くこと

詳ならず、未た以て、其流の長短を指摘して、其盛衰の因て來る處を明にし、一々樂章を擧げて、其墨譜を示さざるは、此書の欠點なりと雖も、我國に樂譜の採用せられたるも近年のことにして、一々其上の曲節の極め難きを憾む。加ふるに、余に、三絃を抱きて、甲乙其宜しきを得るの技なし。唯此樂と、其時世との連關せるところ、此樂と其地との關係せる所の如きは、多少、悉したるものあるを信ず。操のことに至りては、此書或は、纂輯の勞を認めらるべきか。今や國文學の研究逐次に進みて、徳川時代に入り、巢林子の作の如きは、頗る世人の注目する所となり、海音、出雲、半二等の作、亦漸く研究せられんとす。前半の畧史と、後半の年表とによりて成れる此淨瑠璃史も、徳川文學研鑽の一

助ともなるべきか。さきに星川氏の浄瑠璃史あり。處々に氏の創見も見えて、舛裁宜きを得たり。今、又、余の此書を削削に附する所以のものは、氏の著と、余が書とは、編纂の方法に於て、甚相異する所ありて、浄瑠璃と歌舞伎との関係も、氏の書に求め難く、年表も、氏の著に具はらざりしを以てなり。

終に臨みて、特に、恩師上田博士、芳賀矢一先生、坪内博士、幸堂得知翁、關根正直先生の示教を忝うしたるを鳴謝す。殊に關根先生よりは、故只誠翁の劇場年表の恩借を得て、疑を聞きたるもの尠からず。

淺學寡聞、思ふに此書に欠點多からむ。謹みて識者の補正を俟つ。なほ、數年を経て、稿を改むべし。操の記事を多く交

へて、浄瑠璃史と命名せるも、書題の徒に長きを恐れてのみ。諸流の樂章は、遠からず其有名なるものを集めて、續刊せんと期す。

明治三十三年十月三十日

編者識

淨瑠璃 并に 操略史目次

緒言

第一章 創始期…………… 四

第一節 扇柏子時代…………… 四

第二節 三粒渡來の時代…………… 一六

第三節 淨雲時代…………… 二七

第二章 漸盛期…………… 三八

第一節 江戸の概況…………… 三八

第二節 京坂の概況…………… 四七

第三章 最盛期…………… 六五

目次

第一節	大坂の盛況	……	其前半	……	六五
第二節	京都の概況	……	……	……	一〇五
第三節	江戸の概況	……	……	……	一一九
第四節	大坂の盛況	……	其後半	……	一四八
第四章	操漸衰期	……	……	……	一七四
第一節	大坂の概況	……	……	……	一七五
第二節	江戸の概況	……	……	……	二〇〇
第三節	操と歌舞伎との關係	……	……	……	二一〇
第五章	諸流の起伏	……	……	……	二二四

淨瑠璃井に操略史

高野辰之編

緒言

「花飛び蝶駭けども人愁へず。水殿雲廊別に春を置く。實にや元龜天正の妖雲四散して、一たび元和偃武の時運に入りてより以來、世は日に太平の夢裡に闖入して、面に刀瘢を有するもの漸く稀に、父老の手柄話に腕をさする人はあらずして、春風伽羅の香を送り、羅袂花間に翩々として、驕奢豪遊妍を争ひ盛を競ふ。朝に花飛びて、夕に蝶駭けども、人は愁えず。所謂元祿の世とはなれり。げに文藝は泰平の餘業にして、常に靜穩なる民心の反映

なればにか、暇ある大宮人の櫻かざし、程の頃より、望月の誇稱を聞くに至りし迄の世の静けさに、奈良平安の文學も生れ出でにき、元祿の世、實に風は枝をならさず。武夫も君様の袂の香に酔ひて、頬鬚の厚きを慨きぬ。應仁以來の文運、頓みに振興せしもまた怪むに足らざるなり。而して句に於ける蕉翁、文に於ける松壽軒は、共に當代に唱道せらるべき大立物たるを失はずと雖も、巢林子の詞章と、竹本義太夫の曲節とによりて、殆んど大成せられたる淨瑠璃は、殊に當代の優秀なる文藝を最もよく代表するものにあらずとせんや。吾人の茲に叙述を試みんと欲する處は、即ち此重要なる淨瑠璃の起源と、發達と、變遷と、而して及ぶべくんば、他の藝術との關係にあるなり。

もと、淨瑠璃は端を室町時代に開き、慶長元和以降の氣運に伴ひて漸々開展し、木偶に合せて操を興行する事、貞享元祿より、寛保延享に於て最盛の域に達し、寶曆明和の頃に及びても、其餘勢なほ悔るべからざるものありきと雖も、安永天明以後漸く衰運に向ひ、文化に至りては殆んど退轉せりとも云ふべし。其間通じて百有餘年なり。されど、大薩摩、一中、河東、常盤津、富本、清元諸流歌舞伎に伴ひたるものに至りては、連綿今日に及び、更に義太夫節の如きに至りては、今に最も市井に熾んなり。煌燭影裡、銀鏤の見臺にむかひ、女装男喉、眉を動かし、肩を搖り、嬌聲を揚げて以て有髯男子を恍惚たらしむる娘義太夫の盛況も、またよく人の知る處なり。室町以降こゝに四百年、貞享以

來、諸流交錯して三都に行はれ、時と相合し、地と相戻り、人に容れられ、或るは忌まれ、隆替時を異にし、起伏地を同じうせざるものなきにあらず。暫く章を創始、漸盛、最盛の三に分ち、附するに諸流起伏の章を以てして、現今に及び、其間操の盛衰を説き、或は淨瑠璃の作者に及ぼすものあるべし。

第一章 創始期

第一節 扇拍子時代

淨瑠璃節は、始め淨瑠璃姫物語を語る曲節より出でし名稱なり。淨瑠璃姫物語は、又世に十二段草子ともいはる。蓋し十二段に書かれたるを以てなり。

淨瑠璃節の
起源

こは、織田信長の侍女、小野お通が君を慰めんが爲めに作れるものなりとは、嘗て世に信ぜられたる説なりきと雖も、柳亭記、足薪翁之記、還魂志料等の書、種彦の手に成りてより、此説遂に識者の容るゝ處とならざるに至れり。信長は、天文元年に生れ、享祿四年は恰も其前年に當す。然るに、宗長日記は、享祿四年の條に、宇津山邊の事を記し、旅の宿りに、小座頭して淨瑠璃を語らしめたるを記す。天文九年の守武千句、又淨るり語れ灯の下、今宵はや時は牛若更け果てゝ、の句を載す。既に、田舎渡らひの座頭によりて語られ、或は俳諧の句に收められしを見れば、淨瑠璃は其傳播廣くかつ久しかりしものと考へざるを得ず。お通果して信長の侍女ならむか、淨瑠璃節はお通の創作に附したる

曲節なりとは到底考ふること能はざるなり。また九才の幼童、恐らくは情事に關せる十二段草子の意を解する能はさりしなるべし。況んや享祿四年の日記中既に淨るりの事を載するに於てをや。

小野お通

加ふるに、お通の傳に至りては、其詳なるは固より、其年代すら判然とせず。諸説、各異を樹つ。新見法入の昔々物語(享保十八年成)は、信長の侍女となし、一樂子の竹豊故事(寶曆六年成)と、下崔菴沾涼の江戸砂子(享保十七年成)とは、始め信長に仕へ、後秀吉に仕へたりといひ、江戸名所咄の類は、淀君に仕へたりと傳へ、望海每談は始め後光明院の女御新上東門院に仕へ、秀頼の簾中入興の時介添となり、最後に東福門院に仕へたりと語り、難波土産は、秀吉公の御臺政

十二段草子の作者をお通とす附會の説

所の侍女なりと傳ふ。以上の諸説により、年次を追ふて算すれば、上天文の末つ方より、下元和の初めに至る迄、凡そ六十餘年の間に屬す。而して、名人忌辰録は、元和二年三月五日を以て、お通の歿時とし、其時を五十八歳と記す。即ち永祿二年を以て、其生時となすものにして、其中最も古きに置くものは、信長の侍女となす説なり。畢竟淨瑠璃節を以て、淨瑠璃姫物語に附したる曲節なりとせば、お通は此物語の創作者にはあらざるべし。足薪翁の記に、十二段草子は、信長の侍女の作なりいふ附會の説は、貞享元祿以來の雜書に多く見ゆれども、寛永正保頃の冊子には、未だ見出でず。慶安二年の作、よたれかけに、淨瑠璃御前の事より起りしことは見えたれど、作者のことは載せず。お通がこ

とを附會せしは、慶安より後かといへり。守武千句によりて、天文の頃既に淨瑠璃姫と牛若との物語の世に行れしを知るべしと雖も、そは果して如何なるものなりしか、又今に傳ふる十二段に分けられしものなりしか、そは知るによしなし。足齋翁種彦は、次の如くいへり。

十二段草子の今傳はるは、正保三年の印本、及ひ寛文の印本活版もありとぞ。印本は、左迄の異同なし。古寫本にて傳はるもの二三本を見るに、大異同ありて更に校合なし難し。友人の藏書に、十六段本あり。かく様々の異本あれども、皆天正前の添刪と覺しく、俗言の内に雅言あり、何れか原本ならむ、そは考へ難し。十二段作者を、お通となすこと、天和二年黒川道祐か著せる雍州府志、其最

小野お通は
十二段草子
の改作者なり

も古きものなるべし。

今にして、余輩は其如何なるものなりしかを知る能はず。次に掲ぐる大槻如電氏の説に従ひて、歩を進めんとす。淨るり物語を、三味線に合せて歌ふといふことが起つた。それは、彼の才女の聞えある小野お通といふものに、琵琶法師共が相談して、昔からはやる淨瑠璃物語は、どうしても其儘三味線に合せて語る事が出来ない。何とか仕方があるまいかといつたら、お通は淨瑠璃物語を作り直したのである。新古の二種が、淨瑠璃物語にあるのが證據で、文章は大に違ひます。(俗曲の由來)

これ、お通が此物語に關係したるは、三味線渡來後、即永祿の後となしたる説にして、只新古二種あるを以て、其新し

三絃渡來前
の淨瑠璃樂

扇拍子

くして、三味線に合ふものは、お通の加筆なりとは、早斷に失したるの感なきにあらずといへども、形なくして、影の生ずる理なく、お通は作者として、久しく傳へられたるよりすれば、必ずや多少の關係を有せし人たるべし。さては、改作者たるべしとの説を以て就中最も妥當なるものとなすべきか。

前に述べたる處によりて、淨瑠璃物語は、三味線の渡來に先ちて、既に語り物として世に行はれたるを知るへし。其状態の精しきことに至りては、知り難しといへども、奥淨瑠璃又は仙臺淨瑠璃と稱せらるゝ、扇拍子(扇の骨を鳴らして、拍子を取るなり。仙臺淨瑠璃も、後には三絃に和したれども、始は扇拍子を用ゐしこと、元祿年間の陸奥の三絃

淨瑠璃物語

聞けば扇哉の句によりても知るを得べし。によるものゝ類なりしなるべし。固より後世の如く、一定の樂場を設くる迄に進歩せざりければ、演奏は座頭と稱する瞽者一群の掌中にありて、啻に宴席の興を助くるの用をなすに過ぎざりしものゝ如し。

爰に、聊か淨瑠璃物語の創作につきて顧る處あらむとす。此物語は享祿を遡ること、少なくとも數十年前、何人かの手に成りしものなるべし。傳説に基きたりとも思はれず。義經記の如きも、此當時の書なるべけれども、義經東下りの途にして、三州矢矧に宿し、宿の長者の娘と契を込めたりとはあらず。勿論盛衰記、平語等には影もなき事實なれば、こは全く作者の想像によりて、構成せられたる物語と

十二段草子
と御曹子島
渡り

爲さざるべからず。思ふに、御伽草子の、御曹子島わたりの文調用語等、淨瑠璃姫物語よりも古く、趣向相類する處あるを以てすれば、或は其導きを爲したるにはあらざるか。されど、二者共に年代不明のものにして、或は其因の倒なるやも、亦計り知るべからざるなり。我が友鈴木暢幸君、嘗つて此の物語の成立を説きて、

淨瑠璃物語の作者年代共に分明ならず、されば其の内容材料の何れの邊より得られ、而して之の作者の文學的技能によりて如何に結構せられたるかの研究、亦從つて討尋するに由なく。思ふに當時語りものとして弄ばれたる平家物語東下りの條に、敗將平重衡が梶原景時等に護送せられ、右幕下に致さるべき途次の三州池

田の宿にて、計らずも、如何にせん都の春もをしけれと馴れしあづまの花や散るらん」とて、名残をとめし宗盛卿のおもひ者、熊野御前に逢ひて送答せるを思ひ付きどなし、謠曲烏帽子折及び熊坂に、牛若丸の奥州下りをのべたるを取り合せ、まかも靜御前に名残を惜まるゝ義經の優雅なる一面のみを表彰し、池田を矢矧にあらためて、かくの如き一曲の物語とはなしたるなるべし。といへり。なほ考ふべきなり。さて此の物語の作者は誰ぞ。世の稱するお通は、原作者にあらずして、改作者なりと考ふる時は、彼の女は如電氏の説の如く、三絃に適せしめたるに止まりて、其結構を激變せしめたることはあらざるべし。余輩は、今に傳はれる十二段草子中の、人物の描寫其

起源時代の
節及び先導
者

の他の結構より考ふる時は、或は公家閑居の筆にはあらずやと疑はるゝのみにして、確に、何時何人の手に成りしかを知る能はざるを憾む。又講式變じて、和讃となり、説教となり、諸佛の本縁を説きたるものより、淨瑠璃は生まれたりとの説もあれば、或は作者の案外なる方面に存するやも計り知るべからず。兎に角に茲にはその斷定をなさざるを以てまされりと信ずるなり。

節につきては、昔より諸ふといはず、語るといひ來れるにても、平家の變風なるを知るべく、十二段は平家の十二卷に習へるなりと稱せらるゝこと久しきよりするも、節の生成に最も力ありしは平家なるべく、而して當代以前より行はれたる謠曲、説教、祭文、の節も亦與りて之が一助た

りしは疑なきが如し。平家は、平家物語に出づ。信濃前司行長の著と傳へられ、これに琵琶の節附をなしたるは、盲人生佛をはじめとす。一枝軒隨筆に、平家物語に、引句、語句、の別あり。引句は、節に合せて琵琶に和し、語句は、琵琶をさし置て事實を暗に語る事、素讀に近しとありて、淨瑠璃の樂には、明かに此面影を傳ふるものあり。謠曲は、足利氏以來の式樂にして、世人の普く知る處、説教祭文のことは、後章にまた説く處あるべし。

時に、三絃なしと雖も、盲人等一輩之を奏して世に喜ばれぬ。されども、美食再三しては、其味を失ひ、佳景も再ひ接しては、又其失を拾ふ習ひ、此十二段の繰返しも、年久しきに亘りては、人をして漸く倦厭の情を惹起せしめ、遂に舞の

高嶺、八島、大職冠、御伽草子の鉢被、文正、梵天國の類も語らるゝ事とはなれり。而して三絃渡來後といへども、是等は尙多少其形に變化を來しつゝ、全く棄てらるゝには至らざりき。

第二節 三絃渡來時代

三絃渡來の時期

三絃の渡來は、此樂を大成せしむる基なりしは論なし。三絃考にいふ。三絃は、元朝にはじめて製造し、琉球に傳はり、琉球より我朝に渡來したるは、文祿年間なるべしと。糸竹初心集の如きも、又文祿を以て、渡來の時とせりといへども、竹豊故事、大幣、近代世事談、糸竹大全の類、皆を永祿を以て渡來の時となす。殊に竹豊故事には、永祿五年の春、琉球より泉州堺の津に渡り、信長の下知によりて、禁裏に奉る

見ゆ。要するに、文祿と、永祿と、其間僅かに三十年に過ぎずといへども、樂の進歩に於ける三十年は、決して些少なる關係に止るのみと看過すべきものにあらず。室町殿日記十九に、遊女二人を中に置きて、何心なく三味線を弾きて遊ひけるとあり。これ永祿より天文頃の日記なり。又文祿五年の跋ある義殘後覺に、三味線、太鼓にて踊をなすと記せり。太鼓に合はするには、少なくとも、文祿以前に渡來して人々に試みられ、さて合奏する迄に用ゐられしものど考へざるべからず。故に吾人は暫く、永祿の説を正しとなさんとす。又元來二絃なりしを、堺の琵琶法師、都小路といへる盲人、長谷の觀音に祈りて、靈夢を蒙り、一絃を増して三絃となすと。大幣、糸竹大全の類、此説世に久しといへど

三絃の原器

も、如電氏は又其俗曲の由來に於て、次の如くいへり。
 三味線はもと葡萄牙の樂器にして、原名をラベカといふ。日本にては、訛りてラベイカといへり。始め琉球に渡來し、永祿の末年、日本に入れり。今の三味線にはあらず、胡弓なり。胡弓は、バイオリンと同物なり。此胡弓なるラベカは、三糸にして弓の如き者に馬尾を釣り、これを以て音を出せり。よりて胡弓とはいひしなり。此樂器は、漸次廣まれりといへども、當時の盲人は琵琶に堪能なれば、撥を以て弾くに慣れ、胡弓を以て奏するを難んじ、遂に琵琶の撥を以て、弾き初めたるが三味線の始めなり。

この説當を得たるに似たり。さて、渡來當時の三絃は今の

三絃の舊形
及び古圖

盲人澤住

形と太く異なり、幾多の變遷を経て、今日の形に至りしもの、今様の形は、古近江といへる三絃工の始むる所なり。骨董集、義太夫節、豊後節、長唄等の三絃は、各其製作を異にして、古へのそれと同じからざるなり。東海道名所記、江戸名所記、糸竹初心集、山城四季物語、江戸名所咄、姥櫻、大怒佐、云波草、骨董集、聲曲類纂、集古十種、皆三絃の古圖を載す。かくて、琵琶法師の手によりて奏せられし三絃に、淨瑠璃の上りしも、又其時明ならずといへど、慶長の頃、澤住といふ盲人、琵琶の高手なりしが、三味線をも手練し、琵琶に平家を合するが如く、淨瑠璃の節に合せて、専ら弾けるより、假令、酒吞童子か事を作りたることにもあれ、山姥を作りたることにもあれ、節をつけて三味線に合するものを都

淨瑠璃は謠
すを以て師と

舞曲草子類
て淨瑠璃節に
語らる

て淨瑠璃節といひならはまし故、此音曲の名とはなれり
とぞ。其頃の三味線は、琵琶の手の如くにして、今世行はる
ゝ如く、手の繁きものにはあらず。淨瑠璃も、平家の節にて、
少し和らげ、謠に似たるもの故に、淨瑠璃に師なし、謠を以
て師とせよと、中古の名人、井上播磨は、(貞享二年歿)其門弟
に、傳へりとなむ。これ聲曲類纂に見えたる處なり。以て慶
長當時の淨瑠璃節を、想察するを得べし。瀧野檢校又澤住
と同時の人なり。共に淨瑠璃語りの祖と仰がる。
扱て前の十二段草子は、折にふれて其一部一部を語られ、
其他舞曲の和田酒盛、堀川夜討、百合若大臣、烏帽子折、大職
冠、伏見常盤、八島、高館の類、さては彼の御伽草子の文正草
子、酒顛童子、鉢被、梵天國、物臭太郎の類、何れも此節にて語

られしものゝ如し。殊に梵天國の淨瑠璃は、世に行はれて、
淨瑠璃の祝言には、必ずこれを最後に語りしこと、長唄の
終りに、菊慈童を唄ふが如く、當時の俗に、物の終りを梵天
國とさへ、いはしむるに至れり。當時戦亂の際、文運衰頹し
て、悉く不文の人のみにはあらざりきといへども、尙一般
の世は幼稚にして、新詞章を作り得る程の人に乏しかり
しを以て、舞曲草子類の當時に喜ばれたるものゝ如きは、
直ちに取りて以て、此の節にのせられたりしも、蓋自然の
勢なりしなり。されど舞曲といひ、草子といひ、既に世に行
はるゝこと久しければ、聞く人亦膠より醇に移るの感を
以て、之れに對せしなるべし。寛文延寶に及びて、井上播磨、
宇治加賀等の語りしものを見るに、此等の舞曲草子を、改

慶長已來の
浄瑠璃は舞
曲草子を祖
とす

目貫屋長三
郎引田某

操の起源

作したるもの多きに似たり。爾後、竹本筑後、豊竹越前等の時に及びて、更に首尾を附し、羽翼を添へて、改作したるもの少なからず。されば、故小中村博士は、慶長已來の浄瑠璃は、舞曲及草子をもて、祖とすべしとさへ斷ぜられたり。澤住の門人に、目貫屋長三郎といふものあり。西宮、傀儡子、引田某を語らひ、浄瑠璃に合せて人形を操ることをはしむ。これ實に爾後偉大の勢力を有するに至るべき浄瑠璃操芝居の起源なり。當時禁闕にも召され、後陽成帝の觀覽に備ふるに至れりといへば、その如何に世の嗜好に投じたる、新趣味のものとして歓迎せられしかを推知すべし。これまた慶長年間の事に屬す。從來浄瑠璃は、單に耳にのみ訴ふべき、音樂的物語の性質を有するに過ぎざりしに、

今や土偶を操りて舞台にあらはれ、物語中の動作を其の人形に演ぜしむるに至りては、既に聽くべき一段の物語たるに止らずして、且つは其光景を觀じ、其の伎術の巧妙をも味ふべきものとなりぬ。換言すれば、不完全ながらも、ドラマの性質を表彰し、劇的發達に幾段の進歩を爲すに至りしなり。而して操に用ゐらるゝ人形は畢竟、其表彰せる人物の主要なる場合に適合するを旨として作らるゝものなれば、機に臨み變に應じて情緒の昂低、顔容の變更等を現はすこと難く、到底俳優と同等の價値を有せずといへども、樂いまだ進まず、人未だ進まざる當時にありては、かゝる不完全なる操にても、當時の人は、これに對して少からざる満足を表したりしならむ。

女流の太夫
出づ

程なく女流に、六字南無右衛門、左門よし高等出で、又淨瑠璃を語りたりき。慶長十八年正月、監物某と云ふ者、口宣を拜して、河内と稱す。河内は蓋し六字南無右衛門等と同時の人なり。雍州府志に

及慶長監物某并次郎兵衛某招攝州西宮傀儡師相共經營之云々河内介是淨瑠璃太夫受領之始也

と見ゆ。其如何にして操をなし、か、今にして詳しく知るべからずといへども、慶長年間の古屏風、四條河原觀場の繪に、女太夫の淨瑠璃芝居ありて、三味線ひきも女にて、太夫は扇を持って出語りをなし、人形を遣ふ所より一段高き處に居り、人形は何れも足なく、遣ふ人の首も手も見えず、表櫓の下の札黒塗、縁朱塗、滅金かな物打ち、中の文字金粉

慶長年間の
操

にて、じやうるり内記とありて、此女太夫の名、ものに見えずといふ。此圖は、聲曲類纂一の下に、正保慶安の古畫、京師芝居の圖とあれど、誤りなりといふ。以て其度の低かりしを、知るに足る。

阿僧祇定惠海の淨瑠璃通鑑綱目に、京都には、慶長の頃、引田淡路掾、澤角檢校か三味線に合せ、四條河原に芝居を興行して語り始めしより、元和の頃十餘年勤めし處に、六字南無右衛門といへる女太夫出來て、瀧野檢校か三味線に合せ、廿餘年勤めたりとあれど、南無右衛門は、慶長の當時より既に語りたるなり。

元和元年、大坂城陥りて、豊臣氏亡び、世漸く靜穩ならむとし、浮浪の徒、息をひそむるに至りては、自然泰平の余業た

淨瑠璃の始
め京都に盛
なりし所以

るべき淨瑠璃の如きも、漸次に進歩し、傳播するに至れり。かくはしめに京都に盛んなりし所以のものは他なし。京都の地、山は紫に、水清く、歴代の帝都、人自ら優長の風を存し、諸公諸卿の住める處、戦亂の間といへども、尙文運の命脈を維きたるの地なり。加ふるに、太閤在世の時、謠を奨めて、士大夫の樂とし、自らも謠ふて以て武人の心を和らけんとし、かつては、淨瑠璃操を見られたる事すらありし程なるを以てなり。地既に然り、人既に然り、時既に然り、淨瑠璃の行はれしは、蓋し怪むに足らざるなり。思ふに、當時文運甚だ開けず。書く人、讀む者、共に稀にして、未だ純文學の勃起は見るべきの時にあらず。概して直覺的に耳目に訴ふるを以て、唯一の嗜好となすべきの世情たりしなり。さ

れば音楽と演技と相待ちたる淨瑠璃操の行はるゝや、一般の人は云はずもあれ、昨日は幾多の矢石に身を冒し、劔戟を枕にして野草をかたしき、明日は組まんずよき敵もがなど此世を修羅の巷に過し來りし老武者も、今はひそかに容饗して、北野祇園、四條、五條にしのびをなし、祿に屈せずと誇りし腰を、我から鼠木戸にまげ、今日の眼よりせば、小兒も笑はん程の操芝居に、時の移るを忘れたる輩もこゝらありけむ。

第三期 淨雲時代

京都の地、平安奠都以來、延喜の華美、貞觀の奢侈につぎて藤氏の專權あり。太平優閑にして、因襲つひに地方的氣質を形成し、加ふるに、鴨の清川、東山の翠綠、嵯峨の秋、嵐山の

春、自ら人をして遊惰に赴かしむ。實に泰平の都たるべくして、羈府を置くべからざるの地たり。藤氏こゝにありて蕩逸に流れ、平氏こゝにありて、壽永の哀を止む。次ぎて豊臣氏、又非運に終れり。先には頼朝、後には家康、各覆轍に鑑みて、遠く居を關東樞要の地に築き、殊に家康の偉なる。天正十八年、八州を領して東武の要地を撰し、慶長八年、將軍に上れば、諸侯參覲し、十一年を以て、宏壯なる江戸城を築くに及びては、昔の曠野草原日に形を變して百事輻湊の地、複雑なる運動の集合點となり、忽ち江戸にあらざれば事を爲すべからざるの勢とはなれり。勃興の氣運、此の如くなるに伴ひて、淨瑠璃節、亦江戸に起るに至れり。江戸の始祖を、薩摩淨雲と呼ぶ。

薩摩淨雲

淨雲の祖を淨見といふ。泉州堺の人なり、水無瀬流の琵琶を岩橋檢校に學び、平家を語るに長したりと。其子、淨慶これを嗣ぎ、受領して薩摩掾といへり。西の宮の傀儡師を語らひ、操人形を豊太閤の御覽に供したるは、慶長二年なりといふ。淨雲は、淨慶の子なり。文祿四年を以て生まる。始め虎屋治郎右衛門といひ、又小平太ともいふ。澤住檢校に曲節を學び、後薩摩太夫と改め、雜髮して淨雲と號す。寛永の初年、(竹豊故事に、慶長の末年とあれど、悉くは元和の末、寛永の始め頃なるべし。)江戸に下りて、一派の曲節を語り出せり。淨雲又筆才ありきといへども、別に北條宮内といふ者ありて、其文作をなしたりといふ。實に段淨瑠璃は淨雲に始まれるなり。これより先、扇拍子の時代よりして行はれたるは、何れも短かき端淨瑠璃にして、十

淨雲江戸に下る

段淨瑠璃

二段は長篇なりきといへども、僅かに其一部一部を取出て、語るに過ぎざりしなり。段淨瑠璃とは、全篇を數段に別ちたるものにして、江戸淨瑠璃は永く六段の形をとれり。當に江戸のみならず、寛文の播磨はじめて五段淨瑠璃を語るに至る迄、皆多くは六段の形を有せり。寶永年間、木下甚右衛門が橘正勝の正本數十種を刊行したるもの、又皆六段物のみなり。されば、巢林子等筆を五段淨瑠璃に染むるに至る迄は、何れも六段なりきと概言せんも不可なきに似たり。されど寛永十六年を以て刊せられたる、六字南無右衛門の正本、八島は、十二段なりきといへば、こは特に十二段草子の形を傳へたるものといふべく、而して又段淨瑠璃と稱せんには不可なるべし。さて、其端淨瑠璃と

いひ、段淨瑠璃といふと雖も、當時のものは世に傳はるること甚尠なく、加ふるに余輩寡聞、いまだ其多くに接するを得ざりき

事跡合考にいふ、

紀州の浪人小平太、京都に於て淨瑠璃といふ一節を語り出して、澤角勾當といふ琵琶法師の三味線に合せ、西の宮傀儡師源之丞といふものに人形を廻はさせしより、頻りに京都にもてはやされ、終に江戸に下りて、中橋廣小路、其頃は未だ藪原なりし所に芝居を立て、此一曲を諸人に見せたり。是寛永年中の事なり。と、島津侯、在府散策の途次、見て興に入るの餘り、招きて其館に演せしめぬ。土偶の木偶に改まりしも、此時にして、小

島津侯小平太を招く

平太が紙幕の紋打ちたる紫の絹幕に打ち變りしも此時なり。曾我物語を演じて紋盡しに、御家の御紋と語りて太く賞せられ、幕も木偶も賜はりて、小平太が満身の光榮をほどこしたるも、此時なりけり。羅山文集に載する處、又淨雲の伎を傳ふるものなりといふ、疑ひなきにあらねど、考の爲め、左に其一節を掲ぐ。

堂内假構棚層々、疊氈張帷高二丈許長數丈、爲傀儡之戲技也。其木偶或男女僧俗或天仙神女或介士武夫或騎馬擔夫。有舞踏者。有舉扇打鼓者。有踊躍者。有盪舟掉歌者。有戰死而身首異處者。有衣冠者。有放矢者。振棒者。舉旗捧蓋傘者。或爲龍蛇。或爲飛物。或爲狐。且舉火于尾。見者皆恠之。始自巳午之交。至于哺。其隱在棚底。歌者聲

淨雲の操禁せらる

有上有下有細有巨。有鼓吹蠻琴。應於木偶之動。而有曲節。且操之引之。且踏板以喚者。與木偶相得不異。殆如生矣。今日所爲者。江戸第一之偃師號小平太。近世傀儡子此爲巧手云々

これ、島津侯に召されたる時の伎を傳へしものなりや、否やを知らずと雖も、尙操の當時を窺ふに足るものあり。

又王露叢に曰く

寛永十二年江戸堺町に於て、天下一下り薩摩太夫、鼠木戸の上に幕を張り、絹の紫に染め、十文字の紋をつけ、且又淨瑠璃人形の衣裳、其外歌舞伎役者の衣類等、結構を盡せしかば、國家よりこれを禁じたまひ、さつまた太夫等禁獄せらる。

と。土偶進みて木偶となり、紙幕は進みて絹幕となり、其他萬事頗る整ひ、未だ素朴なる當時の人を驚かしめたるものありて、官の禁止禁獄にさへ處せられたるをおもへば、其如何に世態に先立ちたる發達をなしたりしかを想見すべし。

其樂風如何は傳はらざれども、癡痕武士の多き江戸に行はれし樂なれば、剛快勇壯時に清雅の調を交へたるが如きものなりしならむ。而して禁令も程なく解かれたりしものと見え、寛永十年の印本「東めぐり」に、薩摩虎屋の行はれたることを記す。

操は、如此世に行はれ、女流にも又語る者を出すに至りて、寛永の末年女淨瑠璃は禁せられぬ。女歌舞伎も、亦禁せら

女淨瑠璃禁せらる

歌舞伎の始

る。女歌舞伎の禁止は、人をして放蕩にすさまじむとの理由によれり。女淨瑠璃も亦同様なる理由に依りしものか。爰に少しく歌舞伎の當時を語るべし。

歌舞伎は、慶長年中の阿國が女舞に生まれり。阿國は、出雲の巫女なり。名古屋山三郎、都傳内の徒と共に、男女混淆の歌舞をなし、鉦、笛、鼓の調子に合せて踊を爲せり。慶長の古記に、慶長八年八月、今春女歌舞伎諸國に下るとあれば始めて起りたるは、八年以前よりのことなるべし。慶長十二年には、阿國江戸に下りて舞へり。蓋し淨雲に先たつ。かくて阿國歌舞伎は到る處に賞せられ、慶長十九年には、京都の遊女等、芝居能と稱して、歌舞をなすに至り、又京の遊女、佐渡島正吉、江戸の葎原に、下りて歌舞するに至れり。此時

中村市村兩
座立つ

は既に、三味線を使用す。されば、はじめ阿國等一輩、専門役者の演伎に止りしも今は遊女傾城客引きの手段となりぬれば、風を損ひ、俗を紊る事いよく甚しかるべしとて、官の之れを禁するには至りしなり。禁令の下りしは、江戸は慶長年中にして、京坂は少しく後れたりといふ。女歌舞伎禁せられて後は、若衆歌舞伎専ら行はるゝに至れり。若衆歌舞伎は少しく女歌舞伎に後れて起り、寛永の頃は、大坂に於て阿國歌舞伎と並ひ行はれたりといふ。江戸に於ては、寛永元年猿若勘三郎、歌舞伎興行の願を容れられ、能の間の狂言の如きを演するに至り、十一年には村山又三郎も又興行の願を許さる。前者は中村座の元祖にして、后者は市村座の元祖なり。十九年には、山村長太夫

長唄の始

又許さるゝに至れり。勘三郎の演するや、能の地謠といふべき處に、歌を唄ひて三絃をならさしむ。阿國歌舞伎の時には、未だ三絃を用ゐることなかりき。勘三郎の弟に、勘五郎あり。聲調衆に超絶す。弟はひき且つ唄ひ、兄は出で、前に舞ふ。當時世に珍とせられ、頗る勢力ありしものゝ如し。勘五郎は後の長唄杵屋の元祖にして、長唄は此時にはしまれり。かくて江戸に於ては、猿若狂言に唄ふ長唄と、人形に合せて語る淨瑠璃と、共に三絃を使用すといへども、語るものと、唄ふものとは、全く岐路を異にするに至れり。淨雲は何時頃江戸に下りしか、定かならず。其歿年又明かならず。須らく寛永年間の江戸淨瑠璃を、總括して淨雲時

代と稱せんとす。

第二章 漸盛期

正保四—慶安四—承應三—明暦三—萬治三—
寛文三—延寶八—天和三—貞享

第一節 江戸の概況

淨雲一たひ草野を拓きて樂場をたつるや、天下喜んで之に集ひ諸侯亦之を招ぎ其伎を演ぜしむるに至り、世上は無事にして、人漸く遊興に耽らむとする勢をなしぬ。されども、三河武士の魂、なほ鉄石の如く、太刀を横へて寄らば切らんず勢を存し、尙積年の風習をつぎて萎靡振はざる京都人士とは、全く其嗜好を異にし、これに投合すべき淨

淨雲門下の
四天王

櫻井丹波少
椽

瑠璃も、亦甚だ相同じからざるものありしなり。漸盛期に於ける江戸淨瑠璃の上半は、よく其世を反映するものあり。淨雲の門に、丹後太夫、丹波太夫、源太夫、長門太夫等あり。何れも虎屋と稱し、正保慶安の頃、四天王と稱して世に行はれ、淨雲の子、薩摩次郎右工門、又よく父の箕裘を嗣けり。承應元年、丹後太夫受領して、天下一丹後椽藤原清澄と稱す。長門太夫、丹波太夫、又續きて受領するに至れり。其樂風は何れも淨雲の調を受けて、多少の變化を加へたるに止まる。ひとり、丹波太夫即ち櫻井丹波少椽、平正信、其特色を明にす。關東血氣物語之れを傳へて曰く、
平正信勇力あるに任せ、淨瑠璃も強きことを好みて

語り、二尺許もあらむ鐵の棒によりて、拍子を取る。代々蚕に、親丹波毎日岩をたゞき割り、といへる附合の句も、又此太夫をいへるなり。其子和泉太夫、又人形の損も厭はず、人形の首を抜き、打割打つぶすを、更に搦はず、喜んで語る。元祖、團十郎の荒事は、この太夫の有様を深く用ゐたるなり。丹波かりそめにも弱きことを嫌ひ、木戸働の者迄も一器量あるものを撰ひたり。と。淨雲の樂の壯快なるに習ひて、寧ろ激越暴戻に近づけるものなりしなるべし。されど節譜を示せる正本の未た出てさりし頃なれば、其長短、甲乙、緩急等に至りては知るを得ず。其語る處は、多く岡清兵衛の手に成りし金平物語とて、剛勇古今に比なく、朝比奈、辨慶といへども、後へに瞠

金平物語

人情の轉移

若たるべき假空の人物、金平の行動を語るものなりけり。戦時の氣風いまだ消えやらで、怪力亂心を好む輩少なからざりければ、聽くもの群衆して、鼠木戸を壓し、滿場立錐の餘地なく、何れも丹波の風姿を望みて、切齒扼腕、汗を握り氣激しては衣を捨て、相角鬪し、三才の童子と雖も、又金平を知らざるものなく、金平節の盛んなる事實に驚くべきの勢を爲せり。されど漸く年を閱し、貞享に及び、岡清兵衛歿してよりは、よく其筆に次するものなく、和泉太夫又金平を語るに慣れて人と争ひて之れをあやめ、つひに死刑に處せらるゝ事となり、此の節は頓に衰退するに至れり。而して、漸盛期四十年の間、世は愈々平安にして、承應明暦の頃には湯女の勝山、町風、呂に全盛を極め、君が住家

金平節の絶滅

とおもへばよしや玉の臺も思はじの土手節、河風にきほひて、馬子の聲花やかに、晝夜土手八丁の行きかひ絶えず、岡崎女郎衆の一節切、明暮の空にたぐふに至りては、人情逐次に改まりて、遂に金平節の衰頽を招ぐに至らしめしなり。何ぞ必ずしも語る人なく、作る人なきがためのみならず、然りしものならんや。かくて元祿以降、金平節はいよゝゝ世人のあく所となり、享保に入りて金平地獄廻りを語るや、思はずも大に世の悪評を蒙り、漸く金平蘇生に命脉を維ぎたりといへども、相繼ぐ三代許りにして此の節は享保年中全く三都に絶滅せり。邊土にはなほ語りつぐものありしと見え、弘化年間越後の瞽者にして語るものありきと聲曲類纂に見ゆ。金平本の重なるものは、金平法問論、

語齋

金平天狗問答、金平兜論、金平黒熊、金平千人切、金平犬酒論、金平最期、金平化粧問答、鎌倉管領結城合戦、采女正平庭訓等なり。
 翻て、他の流派を見るに、承應明暦に及びては源太夫の門、伊勢島宮内を出し、丹後椽の門は語齋を出せり。語齋、通稱を岡島吉左衛門といふ。丹後椽の流を學ぶ。三絃の名手、甚之亟にすゝめられて、丹後の節に和するに、四郎與吉、其出處明ならずの風を以てし、遂に一流をなし、明暦年間受領志て、近江大椽と稱す。故に其曲節を近江節と云ふ。寛文の頃、吉原に遊女、因幡ありてよく近江節に長じ、延寶の頃、又遊女和泉、近江節をよくして、語齋も及ばざる處ありきといふ。以て其節の入り易く、達し易かりしを知るに足るべ

肥前節

し。元祿以後、語齋節即ち近江節のこと物に見えずといへば、貞享を限として、世は之れを忘れしならむ。丹後椽の子も又江戸肥前椽藤原清政と受領す。父の跡をつぎて堺町に操を興行し、寛文の頃肥前節と稱して世に行はる。其子半之丞、又其跡を嗣ぐ。

永閑節

寛文の江戸名所記に、大薩摩、小薩摩、丹後椽など名乗りて鼠戸を構へ、太鼓を打ち、日毎に各か營とすと見ゆ。なほ堺町には、永閑の座もあり。和泉太夫の座もありたれば、如何に観客雲集し、晝夜木戸番の呼聲勇ましかりしかは想見するに難からざるなり。永閑も、源太夫の門より出づ。貞享頃より、永閑節と稱して世に行はれたるものなり。延寶八年、操を嚴有院の上覽に供す。先づ數日、土佐椽橘正勝、又二

操上覽

土佐節

の丸に於て酒吞童子を上覽に入る。土佐椽は、浄雲の子薩摩太夫の門より出づ。寛文延寶の頃より、世に傳唱せられ、土佐節は雅なりと稱して、多く遊人の間に弄ばる。かくて享保の頃には、なほ盛に行れしが如しといへども、寶曆年間、及びては、如何にしけん、はや世に捨てられ、僅に物乞の口に上るのみとはなりぬ。

漸盛期江戸の概観

今こゝに、余輩が漸盛期と稱せし間の江戸の浄瑠璃を概観して、一轉、關西の状況に説き及ぼさんとす。浄雲によりて拓かれし江戸浄瑠璃は、世の靜穩なるに伴ひて、廣く世に行はれ、金平節出で、亂餘殘存の武風に應じ、近江、永閑、肥前、土佐の諸流各特長を有して、妍を堺町に競ひ、時に、高貴の間にも召されて、其技を現はし、浄雲の末

流頻りに繁延して、技、技を生し、藝、藝を生ずるの觀を呈するに至れり、其語りたる詞章は、獨語、之れを傳へて曰く、昔物語を演し、忠臣義士の事柄、小人女子も悉く感し合へりといへり、されば所謂世話物と稱するものに至りては、更に行はれざりしものゝ如し。畢竟武を以て興りたる江戸の地は、よしや白馬淺草の橋につどひて、揚柳を手折る人は日に増しぬとも、流石に京坂と其嗜好を異にせしものありしならん。

歌舞伎に至りては、万治元年、猿若勘三郎の子明石、中村勘三郎と改めて父の跡をつぎ、万治三年には森田勘彌、木挽町に芝居を興して、森田座の元祖となり、寛文四年には、續狂言、引幕、大道具立、始まりて市村座を大戲場と稱するに

至り、六年には中村座に惣踊り始めりといへとも、能の間の狂言の少しく發達し、若衆歌舞伎の其技に向て進歩したるものに止りしならんむ。延寶元年、元祖市川才牛紅粉を以て遍身を塗り、三升の鐺の大太力、所謂荒事をはじめて世に喝采せられたるは、これ彼の金平に基けるものなりといへば、多少注意せざるべからざる事項なるべし。歌舞伎も亦淨瑠璃に世話物なかりしが如く、女形及ひ若衆形は、多く之れを京に仰げり。

第二節 京坂の概況

竹豊故事に曰く、京都に昔は淨瑠璃はやらす。説教與八郎、歌念佛日暮林清、同林故、林達等を翫べり。寛文年中に、江戸虎屋源太夫、上京有てより淨瑠璃繁昌し、常芝居も出來せ

寛文以前の
京都の状況

源太夫の上
京

りと源太夫の上京は、寛文年間とのみありて詳かならずといへども、承應、明暦の間既に京都の地に行はれたること、諸書に散見せり。先に慶長年間には、六字南無右衛門等の出て、語るあり。山城名跡志は、寛永十二年に、北野、四條、五條、祇園の地に淨瑠璃歌舞伎の行はれたるを傳ふ。寛永十六年には、南無右衛門の正本刊行せられたり。されば全く行はれざりしにはあらざるべし。承應元年には、杉山丹後太夫上京して四條河原に興行し、明暦三年には源太夫の門人喜太夫上京して又樂場を四條に開けり。伊勢島宮内の伊勢島節は、承應の頃よりして京に行はれたりといへば、源太夫の上京に先たちて又淨瑠璃の行はれたるを知る。必ずしも説教歌念佛の類のみ、勢力ありしにはあら

江戸諸太夫の上京

ざるなり。萬治に刊せられたる東海道名所記、又傳へていふ。

近き頃、江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合ひ、色々珍らしき操をいたしける。程なく宮内は死けり。左内もなくなり、今は其子ども打續きて、操をいたし、面々受領せし内に、喜太夫といふもの上總椽になりて、太平記を語る。其曲節平家とも舞とも謠とも知れぬ島ものなり。云々

明暦四年は、万治元年なり。近き頃とは、承應、明暦のいひならむ。左内は江戸の薩摩が門人にして、杉山丹後と共に上京せりと傳ふ。喜太夫とは源太夫の門人、上總少椽藤原正信なり。而して其島物と稱されしを以ても、當時の曲節を

推測し得べし。かくの如く、源太夫が上京の前、既に京に入れるものに丹後あり、宮内あり、喜太夫ありて世に行はれたるが如くなれば、強ちに京坂の淨瑠璃は源太夫に始まりと爲すべからざるに似たりといへども、宮内、上總、皆これ源太夫の門より出づ。源太夫江戸に於て、其門より永閑を出し、京に宮内を送り、喜太夫を送り、京に上りて山本角太夫と井上播磨とを出せり。薰育の法宜しきを得たるを知るに足る。されば京の淨瑠璃は、源太夫の流によりて隆盛の基を開けりと言はむに不可はなかるべく、常芝居の興行も或は源太夫が上京せる後にありけむ。

井上播磨様

井上播磨様通稱を市郎兵衛といふ、京の人なり。大内の御簾を作るを業とす。音聲逞しくして、謠に長す。源太夫の門

に入りて、淨瑠璃を學び、古流の節譜に心を配り、フシ、チクリ、三重、チン、フシ、チクリ、ハル、ギン等に至る迄、苟もすることなし。計らずも、江戸の萬歳を聽きて悟る處あり、つひに比類なき一流を創めて、浪花に下り、寛文の頃より世に流布す。程なく受領して井上大和椽藤原要榮と稱し、後播磨椽と稱す。景事、道行を語るに長じ、就中うれい修羅を第一として語りけるに、聽く者眞似ねんと欲して遂に能はざりきとか。當時未だ稽古本なく、又容易に其門に入るを許さざりければ、一二行の聞書を覚えて夜あるきの友となすものも世に多かりきといふ。情に應じ、境に合せ、色々に使ひ分けたる餘風、今に残り播磨地と稱して後の竹本豊竹とともに此流を汲めり。(操年代記 邊曲類纂) 倒冠雜誌これを評して

播磨の功績

古今の妙音なれども語り出したしかならず。後程面白きは、ならびなき娘子の新枕ともいつべしといへり。淨雲の江戸を創拓し、源太夫の京都を盛んならしめしと共に稱揚すべきは、播磨が大坂を開けるの功なり。播磨尙京に在りて大坂に下るの前、歌舞伎事始によれば、佐内、宮内の徒大坂に下りて、五日間許づゝ操を興行せし事あり。又初代竹田出雲等寛文の初年下坂して、からくりを興行したることなきにあらずといへども、後に竹本を出し、豊竹を出して、大坂の地に淨瑠璃操の全盛を致さしめたるもの、播磨實に其基をなせるなり。今昔操年代記の傳ふる處によれば、頼義北國落中の掛物揃、菅原親王の歌仙の段、源氏築紫合戦の宮島八景、頼光跡目論中の鹽がまの段、馬

播磨の伎倆

井上播磨歿

の段、或は屏風八景、五天竺等は何れも播磨が其妙に入りたるものなりきといへども、其詞章概ね拙劣にして趣味なく、道行といへども名所方角に前後矛盾あり、文にくり言ありて、亂れたる糸の如くなりきと。されども、一たび播磨によりて語り出さるゝに及びては、その曲節和合して、甲乙其宜しきに叶ひ、聴衆も去らむと欲して其席を捨て難かりしものありきと。貞享の初年なりけむ、求めに應じて、京の四條に赴けり。京都はもと己の故山なれば、吉日良辰を撰び、人形、道具、役者に至る迄、善美を盡して入京し、先づ頼光跡目論を演するや、京中の好評響ふるに物なく、日毎群衆鼠木戸に溢れ、其勢天に冲せんとして俄然病歿せり。享年五十四、實に貞享二年五月十九日なり。

播磨が上京以前の京都も、また盛んなりきと云はざるを得ず。山本角太夫土佐あり。宇治嘉太夫加賀ありて、各其華を競へり。

山本土佐椽

山本土佐、通稱を角太夫といふ、大坂の人なり。上京して源太夫の門に學び、或は伊勢島宮内の門人なりともいふ。上達して一流をなし、角太夫節と稱して世に行はる。寛文延寶の頃、専ら南京操を用ゐしを以て聞ゆ。元祿三年の人倫訓蒙圖彙に、角太夫の座を畫けるものあり。人形には何れも足なくして、手をさし込みて遣ひ、三味線ひきは座頭に於て、涼臺の床机の如きものを土間に据へて其上にて語り。人形の後なる幕の内にて語り、出語りにはあらず。思ふに江戸の當時の操座に比して大差なかりしならむ。

宇治加賀椽

角太夫が口宣を拜して、山本土佐椽藤原房正と稱するに至りしは、延寶五年十二月十一日の事なりき。同日、宇治嘉太夫又受領して、宇治加賀椽藤原好澄と稱す。加賀は宮内の門より出づ。紀州和歌山の人なり。天性音曲を好み、殊に謠に長す。播磨の流を去りて、工夫を案し、つひに一流をなして、竹屋庄兵衛と計り、伊勢島宮内の名代を以て、大看板を掲げ、新作虎遁世記を語りぬ。これ延寶三年の事なりき。操年代記、其曲節を傳へて曰く。

加賀の樂風

播磨風を表とし、節配り細かに、よはくたよく美しく語り出せば、京の見物頭から氣に入りて、思の外評判よく、段々新作の淨瑠璃を出し、人形衣裳迄きれいに拵へ、云々

加賀の功

と。由來京都の地、切た投げたの大立廻を聞く事なく、淡泊の質に乏しく、人は濃艶にして華麗を好み。此意氣に投合して、高評を博せる。加賀の譜節は、詳説するを俟たずして明かなるべし。節配細かによはく「たよく」とは、よく其曲節を評し得たるものならん。而して宮内來り、上總來り、角太夫出でしかども、江戸の餘風を仰ぐに止まりしを、處と人々に應じて、京都特有の調を帯ばしめたるものは、實に加賀様の功となさざるべからず。

天王寺の五郎兵衛

延寶五年正月の事なりき。宇治嘉太夫天王寺の五郎兵衛といふものを脇にかゝへて、西行物語を興行せり。二段目、藤澤入道夜盜の修羅を語るものは、五郎兵衛なりき。五郎兵衛元來大音にて、甲乙共に揃ひ、俎板に釘かすがひを打

ちたる如く、何程の大入にても届かぬといふ事なし。字止め、句頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ、見物喜ぶ事限りなし。嘉太夫亦其技を稱して、將來我鋒先のかひになるべきは、此男なるべしといへり。何ぞ知らむ、未來の剛の者、加賀が一たび對抗して一敗地に塗れ、遂に息を殺して引退せしめらるべき強敵とならむとは、そも天王寺の五郎兵衛とは誰ぞ。後の竹本義太夫、元祿十四年受領して竹本筑後椽藤原博教と稱したるものこれなり。嘉太夫の盛名を京都に博したるもの、竹屋庄兵衛の力尠からざりしなり。まことに、竹庄を以て水となさば、嘉太夫を以て魚にも比すべし。されど、水魚の交も、一朝にして變ずるの習なきにあらず。嘉太夫、藝の筋に於て一度竹庄と

世繼曾我

隙を生ずるや、竹庄は五郎兵衛を誘ひて、遠く西に下れり。然れども、積年の名聲は、當時の五郎兵衛を失ひて、興行を杜絶すべき嘉太夫にはあらざりき。なほ日に繁盛を加へて、加賀椽と受領するに至れり。爾來加賀節と稱へられ、嘉太夫節と弘められて、京中の人氣を一身に擔ひ、殊に近松門左衛門の作れる、世繼曾我を興行するや、年は既に五十に前後して、曲節圓熟し、律呂甲乙和合して、聽者の神を奪ひ、加ふるに詞章の結構妙趣、當時に比なく、全盛ならぶものなきの有様なりき。畢竟又これ京人の氣質に投合して、思ふつほにあたりめ、嚴しかりしにもよらずんばあらず。延寶年間の京都には、宇治加賀椽ありしのみにはあらず。山本角太夫の門より出てし、松元治太夫ありて、自ら操芝

延寶年間の京都

東西人情の差異

居を興行するあり。都一中もまた角太夫に習ひて、延寶六年土佐の座に万屋助六の心中を語るや、大に離され、正徳三年、江戸の山村座に入りて、花館愛護櫻となり、團十郎の助六、古今の大當りをとれりと傳へらるゝ程なりき。心中淨瑠璃は、未だ江戸に於て現はれず、大時代にあらざれば、人情に合し難きに、京坂にありては、色事六分の筋にあらざれば、容られ難かりしを以てするも、如何に東西の人情に差異ありしかを知るべきなり。獨語に、寛文延寶頃迄の淨瑠璃は、皆昔物語を演せし故に、詞やさしく綴りなして、あはれにをかしき事も多かり。淫聲といひながら、忠臣、義士、節婦の事をいへば、愚かなる小人女子も之れを聞きては、感じ合へりとあるに比して、京坂の地は漸く江戸淨瑠

京坂歌舞伎の概況

璃にあき足らで、心中物を歓迎し、或は瀧口横笛のぬれ物語に、現をぬかさんとするに至れり。こゝに余輩は少しく、京坂歌舞伎の概況を述べて、竹本義太夫等以後の最盛期に向はんとす。

寛永の末年、女浄瑠璃女歌舞伎共に禁ぜられたりといへども、江戸には猿若勘三郎の中村座あり、村山又三郎の市村座あり。又山村座ありて、よしや、踊はなれ狂言の類なりしにもせよ、木挽町、堺町あたりの繁榮は、想察せらるゝに、京にては承應元年、祇園村の争論及び女形、橋本金作の仕損じよりして、歌舞伎の禁令を見るに至り、之れが爲めに生計難澁に陥るものさへ多く、漸くにして村山又兵衛の歎訴により、物真似狂言盡の名を以て許さるゝに至りし

非人仇討

のみ。歌舞伎事始の傳ふる處によれば、慶安五年、大坂に於て鹽屋九郎右衛門、大坂太左衛門、松本名左衛門の三人に櫓を許されたりといへども、萬治三年更に森田座の創設せられたる江戸に比して、京坂の地は到底斯運の發達に後れたるの感なき能はず。されど、寛文に至りては、大坂の福井彌五右衛門、はじめて續狂言非人仇討を作り、京都にも、七ヶ處の櫓を許さるゝに至りぬ。延寶元年、江戸に團十郎荒事をはじめむれば、六年京都に夕霧名残の正月成れり。こは名優坂田藤十郎が一生の間に、十八回演じたりと傳へらるゝものなり。十二段草子の歌舞伎に仕組まれたる十二段も、思ふに當時を去る事遠からざりしなるべし。かくて、京坂の地の歌舞伎は、當時世にもてはやさるゝ事淨

十二段

瑠璃操と大差なかりしに似たり。人はいふ。若衆歌舞伎禁
ぜられて、操流行を極むるに至れりと。余輩の考ふる處に
よれば、若衆歌舞伎は、其目的に於て異なるものあり。技藝
巧ならむよりは、容姿の美なると、肉の柔かなるとを撰べ
るなり。而して弊害の起りて禁ぜられたるは、慶安五年の
事なりとす。されど慶安以後、歌舞伎は之れが爲めに絶滅
したるにあらず。大なる江戸の四座、京の七座、大坂の數座、
何れも離狂言を放れて續狂言に入り、着々として技藝の
上に進歩したりしなり。されば、容姿の美を要求せらるゝ
若衆歌舞伎禁ぜられたりとて、劇的趣味を供給する淨瑠
璃操に一倍の隆盛を來さしむるの理なく、事實も亦續狂
言の行はれしによりて其の然らざる事を證するなり。又

もし世の人士、若衆歌舞伎の禁ぜられたるによりて演技
の巧妙を見る事能はざるに至りしならば、何ぞ直ちに去
つて渴をば四座七座の續狂言には愈せざりしぞ。然らば
四座七座等の歌舞伎必ず爲に盛んなる流行を爲すに至
るは疑なかりしなり。然るに事實は之に反し、歌舞伎は其
の盛行依然として操興行の隆なるに凌駕する事能はざ
りしにあらずや。多言をまたずして若衆歌舞伎の禁止の
爲めに、操淨瑠璃の繁榮を來せしものにあらざるや知る
べきのみ。そも歌舞伎は操と共に慶長に起りて、逐次に歩
を進めたりと雖も、一は女歌舞伎と若衆歌舞伎とに弊を
生じて禁せられ、爲めに一頓挫を來し、間に一は淨雲あ
りて四天王を出し、丹後は語齋を出し、源太夫は宮内、播磨、

土佐を出し、宮内は加賀を出し、土佐は又一中を出し、名手三都に碁布して妙音を傳へ、近松、西鶴等又筆を執るに至りては、其結構一層の妙を加へ、辰松八郎兵衛の徒ありて、巧に人形を操るに至りては、隆盛他に比すべきものなく、歌舞伎をして屏息せしめんとするの勢ありき、而して歌舞伎が承應元年の禁令も、物真似狂言盡の名を以て再ひ解かれ、續狂言も起り、大道具立も始まり、時代も演じ、世話も演じ、世のこれに傾かざりしにはあらずといへども、其結構、其俳優は、到底操の八方揃には及ぶこと能はざりしなり。尙最盛期と稱すべき、貞享以後に及びては、作者に近松あり。語る者に義太夫ありて一世を傾倒せり。要するに操淨瑠璃の隆盛なりし所以は主として作者と語手と多

く其人を得たるによれりしなり。而して歌舞伎の盛行を見る事能はざりしは、其人を得ざりしこと重なる原因たりしなり。殊に京坂の歌舞伎に於て、甚しく此の陥欠を有したりき。

第三章 最盛期

貞享(四)―元祿(六)―寶永(七)―正徳(五)―享保(三〇)―
元文(五)―寛保(三)―延享(四)―寛延(三)―寶曆

第一節 大坂の盛況 其前半

漸盛時代京坂淨瑠璃界の大立物は、井上播磨と宇治加賀となりき。一は強健にして變化に富み、一は濃艶にして微を穿ち、各其特長を競ひぬ。竹本義太夫出で、兩家の長を

採り、此樂を大成してより以來、凡八十年淨瑠璃操の隆盛は殆んど歌舞伎をして顔色なからしめ、専ら其據る處を操に求めしむるに至れり。

竹本義太夫

竹本義太夫は、攝州東成郡四天王寺村の農夫にして、五郎兵衛といふ、生得淨瑠璃を好み、然も聲柄大音にして、清潔に、甲乙、地合、自然に兼備す。播磨風を慕ひ、播磨の門人清水理兵衛に就きて、其奥義を傳へらる。理兵衛は大坂安居天神の邊に料理茶屋を業とし、播磨に學びて其妙に入りぬ。播磨の死後、今播磨と稱せらる。嘗て人に勧められて、一座を構へ、新作上東門院を興行す。此時五郎兵衛協を勤めしが、芝居中絶するに及び、上京して四條河原に構へ、自ら清水理太夫と改め、日本王代記、松浦五郎等を興行したれど

清水理兵衛

竹本座設立

も、僅かに半歳をも持續し難く、遂に中絶するに至れり。時に宇治嘉太夫の好評全都を動かし、日に盛んなるを見て、其門に入り、音節の秘術を受けて修行し、古風を仰きては心の師とし、肺肝を碎きては鍛練を盡せり。夜盜の段に加賀を驚かして後、竹屋庄兵衛と共に西に下り、貞享二年二月朔日を以て、大坂道頓堀西の芝居に於て、興行を始むるに至りぬ。名を竹本義太夫と改めしは、此時なり。義太夫かつて考ふるに、播磨の流は地節長くして、音を表とし節を裏とす。嘉太夫は地節短く、音を裏にして節を細かにす。兩流いまだ全からず。いでや折衷して音の表裏を具へ、節の長短を交錯して、序破急を定め、一流を開かんと。こゝに於て宇治加賀椽が近松より得たる、世繼曾我をとりて興行

せり。當時、竹本頼母、多川源太夫等脇を勤め、吉田三郎兵衛、辰松八郎兵衛等人形を遣ふ。これより義太夫の名聲到る處に傳喧せられ、さりどては戀は曲者皆人のと、立つ子、這ふ子、丁稚、こものに至る迄、口眞似せぬものなきに至りぬ。同年四月八日、宇治の淨瑠璃、藍染川をどりて語るや、其曲節をまねんとするもの愈、多きに及べり。七月、いろは物語を語り、九月、賢女手習鑑を興行して、南堺に向へり。今暫らく當時の京坂につきて一瞥せんか。

播磨様が天壽を以て京に終れるは、貞享二年五月十九日にして、竹本座の起りしより百日を後るゝに過ぎず。死後、播磨の門人、井上市郎太夫、尾崎權左衛門等、京都に止まりて、業平一代記、大職冠知略玉取、跡目論等を語りて下坂せ

加賀浪花に
下りて義太
夫と争ふ

り、當時京都には宇治加賀の勢、昔日に異ならず、大坂には今播磨と呼ばれる、理兵衛あり、山本土佐の門より出たる岡本文彌ありて、伊藤出羽様が芝居に文彌節の一流をなしぬ。されば播磨は歿せりといへども、京坂の勢は愈々猛進し、義太夫の流出て、人々耳を傾くるに至りては、傷を浮べたる淨雲時代の浪江も、今や將さに楚に入り、混々として舟揖を浮ぶるに至らんとす。

貞京三年加賀椽、浪花に下れり、浪花は當時義太夫が全盛の地たり。これ深く心に決する處ありて、義太夫の向ふを張り、竹庄の鼻を明かせ、呉れんどの所存なりけむ。其語る處は西鶴の筆に成れる曆なりき。(曆は今傳はらざるか、見たり曰く、大經師昔曆といへば、近松のおさん茂兵衛の事件にして、近松は曆にならひたるには、あらざるかと、余輩又これに同せんと欲す。おさん茂兵衛

の事件は、西鶴の五（義太夫の座にては、賢女手習井新曆と題して相争へり。好尚の赴く處、如何ともすべからず、義太夫の座は、群衆日毎に場を満たせども、加賀の座は寧ろ寂漠と稱するに近くして、遂に中絶の止むを得ざるに至りぬ。こゝに外題を改めて凱陣八島を興行し、（凱陣八島は一般に西鶴襲庭萱村氏は、其七行刊本に近松の署名ありと稱すれども、名あるものありとて、近松の作とせり）先の頽勢を挽回し、稍好評を得るに至りしに不幸火災に逢ひて果たす能はず、加賀怨を飲んで歸京せり。此に至りては、宇治の明月も竹本の朝暉に其光を失へりと稱すべく、其餘の群星は、影を潜めたること、敢て言ふを俟たざるなり。

同年、義太夫縁を近松門左衛門に求め、出世景清の作を得て興行せり。これ近松が義太夫の爲めに作れる初作なり。

出世景清

近松門左衛門
浪花に下る

とす。次で源氏移徙祝頼朝七騎落を興行するにつれて、其節を慕ふもの漸く多く、佐々木大鑑并に藤戸先陣には、松よひ時雨相の山道の道行、思ひ川ほさぬ袂の語り出し、珍敷趣向なりとて到る處稽古せぬ者なきに至り、義太夫節と稱して、いたく世に廣まりぬ。元祿に入りて近松巢林子源氏冷泉節、天智天皇等をもものして、浪花に下り爾後専ら義太夫が爲めに筆を執れり。實に元祿三年正月の事なり。時はこれ義太夫の語り盛りにして、日に増し音聲に實のりを生じ、巢林子は和漢の學才を具へて深く佛學に通じ、其ひろき同情を作に寓し、該博の識は詞に花を咲かせ、聞く人見る人をして、竹本座ならでは、義太夫ならではと感ぜしむるに至りぬ。然れども、當時浪花の歌舞伎芝居に

百日會我

當り多く、一方には伊藤出羽座に種々のからくり有り。加ふるに岡本文彌ありて、こゝに一流を語り山本飛彈椽、又手妻人形の所作事を交へ、市中は固より遠國迄も其技を稱するあり、なほ文彌の門人岡本阿波太夫の愁節に長ずるさへありしを以て竹本座の所得未た少なく、元祿三年三月源氏十二段を興行し、五年日本西王母、七年松風村雨、八年釋迦如來誕生會を興行せしも、又大入大當を見ざりしが、十年に及び嘗て、近松が宇治の爲めに作れる團扇會我をとりて興行するや、羣衆始めて木戸に溢るゝに至り、百餘日の間連續興行するを得、是に外題を改めて百日會我と稱せり。當時多くは繼續すること五六十日に達せざりきといふ。爾來或は京に行き、堺を訪ひ、伊勢に廻り、元祿

素語りの始

長町女腹切

義太夫受領

曾根崎心中

十二年、本海道虎が石の興行に際して、戻子手摺まがしを考へ出し、人形の遣ひ様を見せ、素語を始めたり。操芝居に舞臺を附したるも、此時を以て始とすといへり。
十三年正月、近松が世話浄瑠璃の始めと稱せらるゝ、長町女腹切を興行し、翌十四年義太夫は口宣を拜して竹本筑後椽藤原博教と呼び受領弘めとして、近松の作蟬丸を興行せり。時に筑後五十一。其曲節愈々圓熟の境に進み、近松の筆又愈々熟達して、竹本座の威勢比なきに至りぬ。元祿十五年四月廿三日の事なりき、曾根崎の天神社内におはつ徳兵衛の情死あり。近松直ちにとりて曾根崎心中と外題を掲げ、五月七日を初日として興行をはじめむるや、近松の名筆に成れる心中物の始といひ、かつは處にありし事

とて、聞く者先を争ひて集まり、竹本座の繁榮、筑後椽の名聲、頼に世を壓して、大坂戯場の桂冠を載くに至れり。翌年再び心中物重井筒を興行し、秋病を以て筑後椽は座本を辭せり。

豊竹若太夫

これより先、大坂南船場の人、河内屋某淨瑠璃を好み、義太夫に學び、十八歳の時竹本采女と稱して、筑後の後芝居に傾城懷子を語り、翌年道具屋吉左衛門と計りて、東立慶町に素淨瑠璃の出語りを始めしかど、抄々しからず、半ばにして興行を廢し、修行の爲め、南堺に下れり。折しも井に投じて心中したるものあり。直ちに一段淨瑠璃に仕組み、心中泪の玉井と外題を掲げたりしに、これ又處の事とて思ひの外に當りを取れり。かくて大坂に歸り、長門九郎兵

心中泪の玉井

豊竹座設立

衛と計りて舞の芝居に、櫓幕豊竹若太夫と記し、看板に堺土産心中泪の玉井とはなやかに掲げたるに、大にはやされ、道行の内、さのみしみと、なげかずと歩ましやれ前には鬼はないものとの一句は、曲節殊に勝れたりとて、町内の初冠迄口眞似するに至り、次の替り金五郎浮名の額、茶屋のなよせの道行には、まことに小さんと我が中は、あの掘りづめの二つ井戸、どちらを見ても深ければと浪花の若衆を喜ばしめたり。これ元祿十五年の事にして、曾根崎心中の前年に當す。是に於て、大坂道頓堀東立慶町には豊竹座あり、西の芝居には竹本座ありて、竹豊の二座相併立し、豊竹の玉の井、竹本の曾根崎、何れも京坂の書肆は軒を列ねて、稽古本を販るに至れり。

竹田清定座本となる

竹本筑後椽病を以て座本を退くや、寶永二年竹田出雲椽清定これに代り、人形、衣裳、道具、建等に至る迄善美を盡し、同年三月二日を以て、用明天皇職人鑑を興行す。これ又近松の作にして、出語出遣は蓋し此時に始れり。大切鐘入の段、竹本筑後椽シテを勤め、竹本浪花ワキを勤む。竹澤權右衛門は三絃を弾き、辰松八郎兵衛はおやま、人形を操れり。次いで竹本座は雪女五枚羽子板を興行し、或は元祿四十七士の事蹟を語り、(碁盤太平記。寶永三年)大經師昔曆を興行して、寶永四年に至り、六月四日を以て、丹波與作を興行するや、大入大當近年に比なく、正徳二年再興行を爲せり。此時若竹政太夫はじめて出座し、大序道中雙六の出語をなす。政太夫は、始め中紅屋長四郎といふ。竹本の流を慕ひ

出語出遣の始

丹波與作

若竹政太夫

て筑後椽に學び、日夜孜々として鍛練し、次第に上達するに及び芝居を勤めんとを乞ひたれども、音聲低しとて許されず。去りて豊竹若太夫の京都興行に加はれり。後歸坂して名を若竹政太夫と改め、新地曾根崎の芝居を勤む。筑後計らずも其語るを聞きて深く心に感じ、我流を傳へんこと、此人を措きて他に求むべからずとなし、呼びかへして竹本政太夫と稱せしめぬ。後の竹本播磨少椽藤原喜教これなり。

海紀音

當時、竹本座に作者として老近松あり。豊竹座に紀海音あり。海音は、有名なる油煙齋貞柳の弟なり。嘗て泉州柿本寺に入りて僧となり、後歸俗して大坂に住し、契沖の門に入りて和歌を學び、元祿の始よりして、豊竹座の爲めに淨瑠

璃の作をなせり。初作は彼の傾城懷子なり。其一たび僧たりし事、近松の僧たりしと相似たり。其學、其識に至りては、近松に數歩を輸したるものゝ如しといへども、當時義太夫、近松と合して竹本座の勢ひ世を風靡するに際し、免も角も豊竹座の作者として擧げられたる人なれば、果して近松に對して、よく豊竹座を隆盛ならしめしか。余輩又豊竹座が、屢々宇治井上等の古淨瑠璃を語りて、海音が作の間斷を補ひし跡あるを見ても、俄かに此間に對して然りと答ふるを得ずといへども、元祿十五年豊竹座の創立に際して、若太夫の爲めに作れる末廣十二段の如きは、かつて近松が、彼の十二段草子より材をとり來りて十二段長生島臺を構へたるを、再ひ筆に上ほし、趣向を複雑にし、變

末廣十二段

化の妙を加へたるを見るも、作者としての伎倆を見るべきものあり。曾根崎心中、竹本座に全盛を極むれば、海音別に八百屋お七を作り、用明天皇、竹本座に大入を見れば、海音又力を曾根松にいたし、正徳に入りて竹本座に梅川忠兵衛現はれて、六月間興行を續くれば、海音又お染久松を作りて大入をとらしむ。ともかくも、當時の若太夫と共に苦心せし様おもひやらるゝなり。

筑後椽殺

竹本座は、寶永二年竹田の座となりてより以來、多少の當り當らぬはありしにもせよ、筑後椽と近松とあり、加ふるに出雲の舞臺に心膽を碎くあり、辰松八郎兵衛、吉田三郎衛等人形の名手ありて、年を追ふに従ひ、繁盛に赴きぬ。さりとして、天命は引きとめん術もあらず、正徳四年九月十日

國性爺合戦

を以て、筑後椽藤原博教は病歿せり。時に歳六十四。貞享以來三十餘年、操にかけて語りたるもの百三十餘番を數ふ。遺言して、竹本政太夫に名跡を相續せしむ。操年代記、其後を傳へて曰く。

筑後芝居相續如何と、町中門弟思ひの外、竹田出雲、頓智發明より、國性爺合戦といふ、淨瑠璃の思ひつき、門左衛門、老功の一作、力瘤を出し、文句のはだへ麗しく、書き廻はしたる筆勢面白く、淨るりは、竹本政太夫、竹本頼母、豊竹万太夫、右三人にて足かけ三年持こたへ、見物から子齧の道行口まねせぬ人なし。筑後椽存命の頃、操淨瑠璃しかく、なかりしが、諸人歌舞伎芝居より面白しども、てはやし、次第に繁昌する事、第一作者の趣興、人形の衣

裳、道具迄はなやかに拵へ、手を盡し美を盡せば、歌舞伎は外になりて、淨瑠璃の評判はしと、隔々迄、耳かしましくおもひり。

と、國性爺合戦は、正徳五年十一月朔日を以て、初日とせり。まことに、三年越十七月の間勤めたりといふ。昔よりの大入なること云ふを俟たず、國性爺は、近松が三傑作の一とも稱せられ、後幾度となく繰返へされ、歌舞伎にも入りしものなり。思ふに、目先變りて當時の人には珍らしく、久仙山景事出語りには、人々神を飛ばし、町内はもとより、近國迄見ぬは恥とつたへて、かくは十七月も持續せしものならむ。筑後椽歿せりといへども、竹本政太夫、陸奥茂太夫、竹本頼母、内匠理太夫、竹本浪花、田川源太夫、長島重太夫等の

突込

あるありて、交互に勤め、漸く老境熟達の域に進みたる豊竹若大夫に抗して、其勢ひを殺かざりしなり。國性爺合戦の如きは、加ふるに辰松吉田の如き人形の妙手ありて、愈々世にはやされしならむ。當時、突込と稱して、下より兩手をさし込み、人形一つを一人して遣ひ、手摺の上へ首を出さず、力を極めて之をさし上げ、短き淨瑠璃とはいひながら、丸一段出遣の如くにて、中々見るもしんどく、又なるべきとも見えざりきといふ。最初の國性爺は吉田三郎兵衛これを勤め、おやまは辰松八郎兵衛なりき。熟々思ふに、筑後様ありとても、近松あらざりせば、かゝる繁盛を見るに難かりしならむ。

近松門左衛門

近松門左衛門、姓を相森といひ、名を信盛といふ。平安堂と

稱し、巢林子と號す。長州萩の人なり。少時、肥前唐津近松寺に遊學し、後上京して或堂上方に仕へ、爵六位に叙せらる。元祿の頃仕を辭して近松門左衛門と稱し、歌舞伎芝居、都万太夫座の爲めに作し、藤壺の後の怨靈藤の花より大蛇となる趣向を立て、世に賞せられたりといふ。巢林子が歌舞伎の爲めに作したるは此一事のみ世に傳はれりといへども、其の他、富永平兵衛等と同時代に、万太夫座の爲めに作りて、今に傳はる者二三に止まらざるなり。思ふに、井上播磨掾の爲めに天鼓を作り、宇治加賀掾の爲めに徒然草、世繼曾我を作りしは、万太夫座の爲めに作りしと同時代なるべし。なほ宇治加賀の爲めに作れる、當流小栗判官、弘徽殿嫉妬打、主馬判官盛久、團扇曾我、加増曾我の如き

は浪花に下る以前の作なるべし。源氏鳥帽子折、頼朝七騎落、又近松の作なりといふ。其貞享以前の作にして、作者不明なるものの内、其筆に成れる者も亦あるなるべし。兎に角、三十歳前後の頃、京にありて筆を走らせたるを知るべきなり。出世景清以前の作、おほむね、金平本、土佐本の舊模型に則りて、多少天才の面影現はれざるにあらずといへども、浪花に下りてよりの作は、世に歓迎せられしと否とを問はず、何れも巧に人情の微を穿ち、胸底の琴線に觸れざるはなし。國性爺以前の作のみにて、誕生會あり、曾根崎心中あり、重井筒あり、丹波興作、紅葉狩、梅川忠兵衛、女楠、穢靜（たじろ）、其他優秀の作、比々皆然り。國性爺に至りて、三年越十七月の興行とは驚くに堪えたりといへども、享保二年二

巽林子没

月、國性爺後日合戦を興行するや、甚だ不入なりしを以て、切に曾根崎心中を語りたりといへり。されども、舞臺大幕の上に小幕を引そめしは此時にして、有名なる人形つかひ吉田文三郎の始めて出座せしも此時なりけり。爾來巢林子は、毎歳必ず三四作を竹本座の爲めにものし、後日合戦につぎて鎗權三重帷子を作り、享保三年には、曾我會稽山、四年には平家女護島、五年には河内通、天の網島、六年には、夫婦池、川中島、七年には心中宵庚申と連年出したる者皆な何れも名篇佳什にして、永く后世をして嗟嘆措く能はざらしめ、遂に享保九年十一月廿二日を以て、其終焉の期となせり。時に年七十二。而して右大將鎌倉實記は、實に其絶筆なりき。はじめて井上播磨の爲めに筆を執りてよ

り以來、其作に係るもの百有余篇、咳唾珠玉をなし、婉轉たる其調、陸離たる其文彩、巧に義理と人情との衝突を畫き、同情の念止み難からしむる心中物の如きは、後人の企及し得る處にあらずと稱せらる。其天才を以て遇せられ、其作を以て國文學中の精華と尊尙せらるゝ所以のもの、決して其理なきにあらざるなり。又巢林子が執筆の用意に至りては、難波土産の傳ふるところ密なり。此書は、近松半二の父穂積以貫の著にして、以貫は近松と親交ありしものなり。曰く

○某往年近松が許にとむらひけるとき、近松云ひけるは、惣じて淨瑠璃は人形にかくるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句皆な働きを肝要とする活物なり。殊に

巢林子執筆
の用意

歌舞伎の生身の藝と芝居の軒をならべてなす業なるに、正根なき木偶に色々の情をもたせて、見物の感をとらむとする事なれば、大方にては妙作といふに至り難し。某若かき時、大内の草紙を見侍りける内に、節會の折ふし、雪いたう降り積りけるに、衛士に仰せて、橘の雪拂はせられければ、傍へなる松の枝もたはゝなるが、うらめしげにはね返りてと書けり。是心なき草木を開眼したる筆勢なり。これを手本として、我淨瑠璃の精神を入るゝ事を悟れり。されば、地文句、せりふ事はいふに及はず、道行などの風景をのぶる文句も、情をこむるを肝要とせざれば、必ず感心のうすきものなり。文句は情をもとゝす。文句に天爾波多ければ、何となく賤しきもの

なり。然るに無功なる作者は、文句を必ず和歌、或は俳諧などの如くに心得て、五字七字の字配りを合さんとす。故、おのづと無用の天爾波多くなるなり。例へば年もゆかぬ娘をといふべきをば、年はも行かぬ娘をばといふが如くなる事、字わりに關るよりおとりて自然と詞づら賤しく聞ゆ。されば、大様は文句の長短を揃へて書くべき事なれども、淨瑠璃はもと音曲なれば、語る處の長短は節にあり。作者より字配りを去かどつめ過ぐれば、かへつて口にかゝらぬ事あるものなり。我作には此かゝはりなき故、天爾波おのづと少し。

昔の淨瑠璃は、今の祭文同然にて、花も實もなきものなりしを、某出て加賀椽より筑後椽へうつりて作文せし

より、文句に心を用ゐる事、昔に替りて一等高く、例へば公家武家より以下皆夫々格を別ち、威儀の別よりして詞遣ひ迄、其うつりを專一とす。此故に同じ武家なりといへども、或は大名或は家老、其外祿の高下につけて、其程々の格をもつて差別をなす。是もよむ人の、夫々の情によくうつらむ事を、肝要とする故なり。

淨瑠璃の文句、皆實事を有のまゝに寫す内に、又藝になりて、實事になき事あり。近くは女形の口上、多くは實の女の口にえいはぬ事多し。是等は、又藝といふものにて、實の女の口より得いはぬ事を打出していふ故、其實情があらはるゝ也。此類を實の女の情に本づきて包みたる時は、女の底意ななどがあらはれずして、却て慰にな

らぬ故なり。さるによりて、藝といふ所へ氣をつけずして見る時は、女に不相應なるけうとき詞などおほしとそしるべし。此外、敵役の餘りに臆病なる躰や、道化様のおかしみをとる所、實事の外、藝に見なすべき處多し。是を見る人、其志ん酌あるべき事なり。

淨瑠璃は憂きが肝要なりとて、多くあはれなりなどいふ文句を書き、又は語るにも文彌節様の如くに泣くが如く語る事、我作のいきかたにはなき事なり。某の憂は、皆義理を専らとす。藝のりくぎが義理につまりてあはれなれば、節も文句もきつとまたる故、愈々あはれなるものなり。下略

藝といふものは、實と虚との皮膜の間にあるものなり。

虚にして虚にあらず、實にして實にあらず、此間に慰みあるものなり。像を畫かんにも、又木に刻まんにも、正眞の形を似する内に、又大まかなる所あるが、結句人の愛する種とはなる也。楊貴妃とても、欠くる處なきにあらず。其まゝ寫さば、愛そのつくる處あるべし。

これを見るに、巢林子は明かに木偶の短處を知りて之れを補ひ、語りものなる事に留意しては、耳に適せしめんと計り、不自然を避けんとしては、武夫と常人の別を寫さんと力めたるを見るべきなり。其藝と稱する處は、實によく木偶の短を補はんと力めたるにはあらざるか。木偶もどこれ心靈を有するものにあらざれば、如何に之れを遣ふもの巧なりとも、機微の感情、心意の轉變、一々之を現さん

こと難く、加ふるに色に現はして、所謂腹藝と稱するものを爲す能はざるなり。是に於て、妙齡の佳人にも、胸底の秘音を打出さしめて、以て、觀者に傳へざるべからず。慘極まりて、涕泣すると、歡切にして、涙を流すとの差、僞の涙、悲みの涙、悪漢の打擲、慈母の折檻の別、到底操のみにては之れを區別する能はず。これ又語り物に於て、之れを補はざるべからず。巢林子はよく此點に留意して筆を執りたるを知るべく、某が憂は義理を專にすと説ける處、これ又大坂の地、商家其多きを占め、利屈に長じたる人情に投合せしめたるを語るものにはあらざるか。とまれ、這般の用意ありて筆を運べる巢林子あり、諸流の長をとりて大成したる義太夫あり。竹本座の全盛當時に冠たりしもの、これ又

近松の作の概評

所因深きものと云はざるべからず。生身の俳優に對し木偶を弄する彼の操座にして、平安堂の如き偉人を得ず、歌舞伎に其人ありたらむには、或は夫れ操は元祿を限りとして、寶永正徳の頃には既に絶滅に及びしやも知るべからず。始め京都にありて、万太夫座の爲めに屢々作して、自ら狂言作者近松門左衛門と署名したる巢林子にして、義太夫の求めに應じて、浪花に下りし元祿三年正月は、實に操史中最も記憶すべき時日なりけり。坪内博士、往年近松の作を概評せられたるものあり。言々その節に當る。續小羊漫言中より一節を抄録して、近松が諸作の概評となす。彼れが作は、其躰に於ては叙事詩になれど、其用に於ては脚本なり。彼れは聽かしむると同時に、見えしめんと

力めたり。彼れは、毎に作と三絃との關係に注意し、又毎に作と傀儡との關係に注意せり。かるがゆゑに、正しく彼れを批判せんする者は、ひとり讀むべき文章としてのみ彼れが作を觀るべからず、聽くべきものとしての價値ならびに看るべきものとしての効果をも考へざるべからず。而して近松が最も心を潜めたるは、明かに後の二需要に應ずるの秘訣なり。彼れは此の二需要に應ぜんがために、當時存在したりしあらゆる材料を蒐集し、巧みに之れを混和したり。例へば聽覺を悦ばしめんがためには、當時唯一の劇詩むしろ抒情詩的劇詩ともいふべき、謠曲及ひ狂言の粹を抜き、或は平家琵琶、或は説經、祭文、俗歌、童謠、鄙曲、流行節その他あらゆる謠ひ

もの、要素は、自在に之れを拾收し來たりて其作中に利用せざるなし、さてまた、視覺を娛ません爲には、已に其のころ行はれたりし、尙幼稚なる傀儡はいふに及ばず、能狂言に於ける扮裝、科介、雅びたる舞蹈、俗間の踊の手、あらゆる興行物(見世物)ありとある(展覽物)の、苟も人目を悦ばすに足るべきものは、取りて以つて材料とし、之れを其の作に利用せざるなし。實に目に訴ふると、耳に訴ふるとは、巢林子が常住の目的なりき。彼れは此の二需要だに充すことを得ば、其の他を毀損する事あらんも介意せざりし也。彼れ豈に必ずしも普通の語格文法を知らざりし者ならんや。而も節奏の爲には、わざと國文の格を破り、若しは誦讀の便宜の爲には、わざと通

俗の訛語を物し、又衍字をも記させたり。今に傳はれる刊行本に甚しき衍字アテ字あるは、勿論謄寫者の誤ならめど、幾分かは作者の杜撰もまぢりたらんか、例へば「澁面」など記すべきを「十面」に書し、「かくて」を「角て」、「伴ひ」を「友なひ」、「爲り」を「成」、「夫」を「妻」など物したるは、作者のあづかり知らぬ所なりとするも、他の幾多の衍は或は讀ましむるを主とせずして、朗誦せしむるを本意とせし、作者巢林子の機轉にあらずや。且や、彼れは常に下等社會をもて正規の觀客とせり。此の故に、彼れは毎に通俗を本願とせり。これ實に近松を評するに於て前にいへる二條件と共に、評者の忘るへからざる要點なり。彼れは通俗の需要に應せんが爲に、しばしく大なる犠牲を

供せり。明にいへば、詩としての彼れが作の失病は、概して此の通俗主義より來たれり。彼れは、無學文盲なる數多の俗衆を悦ばせんとせり。彼れは婦人小兒の耳目をも娛ませんとせり。而して此約束に従はんとせば、義經も、頼朝も、巴女も、鎌足も、天智帝も、時致も、祐經も、この花さくや、姫も、稻だ、姫も、靜御前も、巴女も、自然の、必要によりて、元祿期の華奢なる流行衣裳を被りて現れ、多少當時の通語を使ひ、時としては、全くの元祿人となり、則ち全く世話にくたけて、正當の看客たる下等社會の同感情を呼ばざるべからず。彼等の言説する所も、下等社會の智識以外にいづべからず、菅原道眞の博學なるも、悉陀太子の高上なるも、智識以上に論議すべからず。蓋し

俗衆の知識は、支那の事蹟は、「三國史」「漢楚軍談」「二十四孝」のたぐひの外にいでずして、本朝の事蹟は、「義經記」「盛衰記」「太平記」等を極とす。こゝに於てや、作者も、人物も、常に其口を束せざるべからず。彼等は、智者といへば孔明、正成、勇者といへば、朝比奈辨慶、孝子といへば、曾我兄弟、忠臣といへば、豫讓の故事、只管看者に解し易からむを要とせり。故に時代違ひ、風俗人情の相違、史的事實の甚しき謬寫、若くは我神代の人物が唐宋の故事を語り、保元平治の武將が元以後の事實を引用するなどは、もとより異しむに足らざることなり。

轉じて豊竹座の當時をかへり見んか、若太夫海音と共に力を合せて興行せりと雖も、設立既に日久しくして已れ

豊竹座の概況

の師たる義太夫あり、老功の近松を有する竹本座に對して、充分の觀客を分たん事實に難事といはざるべからず。加ふるに、若太夫の曲節は義太夫を學びて別に一流を出したるにあらざるをや。如何に物見遊山に日を過す人多き元祿時代なればとて、竹本座の落ちこぼれのみ拾ひては、三八の十八、何れ足らはざりし慥きの程思ひやらるゝなり。竹本座國性爺に大當りをとり、近國近在より群衆して木戸も張りさけんとする當時、之に對する豊竹座は寂寞たりしか。兎に角に海音の鎌倉尼將軍、花山院都異、甲陽軍艦時世耕、相次ぎて興行せられぬ。思ふに竹本座は三年越の國性爺興行なれば、二たび見、三たび聞きては、なほ他に目新しきものを求むるは、蓋し人の常なれば豊竹座に

豊竹座漸く盛んなり

も、又相應の入りはありしならむ。享保三年正月二日、豊竹若太夫受領して、上野椽藤原重勝と稱し、海音の鎌倉三代記を興行す。同日竹本座にありては、山崎與次兵衛壽門松を興行せり。これ又近松の作に係る。享保五年正月竹本座に國性爺の再興行あれば、同日より豊竹座に鎮西八郎唐土船あり、竹本座の雙生隅田川、豊竹座の日本傾城始、竹本座の川中島、今國性爺は、豊竹座の吳越軍談、大友王子玉座靴と、何れも年を同じうし日を同じうして興行せり。又豊竹座も漸く竹本座に抗して、櫓紋の鮮かに認められしを想察するに足るべし。海音が傑作と稱せらるゝ心中二つ腹帯は、巢林子の宵庚申と同一の事實を作して興行も月を同じうす。記録曾我と傾城無間鐘とは、竹本座の大塔宮

心中二つ腹帯と心中宵庚申

海音の功

躰鎧に抗して享保八年、豊竹座の興行せし物に係る。かくて無間鐘は、海音が豊竹座の爲めに、連続して作れる最終の作なりき。海音は寛保二年を以て歿せりといへども、享保八年以後筆を執らざりしものゝ如し。こゝに海音につきて更に考ふるに、若太夫が豊竹座を立慶町に立て、よりに以來、こゝに二十餘年、其の間錦文流、戸川不鱗等の一二作と近松の數作とを除きて、其古淨瑠璃ならざるものは、皆な紀海音の作を以て興行せり。鎌倉三代記、八百屋お七、心中二腹帯は、其秀作と稱せらるゝものなり。固より、近松と其席を同じうするものにあらずといへども、巢林子以後筆を淨瑠璃に染むるもの二百餘人、其勝れたるものを數へて五指を屈すれば、其一は必ず海音が爲にせらるゝ

なるべし。又以て其偉人たるを知るに足る。享保八年、海音筆を絶ち、九年、巢林子硯を棄て、幽明所を異にし、重壤遠く隔つるに至れり。爾後竹本座に作者として、竹田出雲、松田和吉、長谷川千四等あり。豊竹座に、西澤一風、田中千柳、並木宗輔、安田蛙文等ありて、互に奇を争ひ、新を弄し、所謂やまを設くること漸く繁く、豊竹座に若太夫即ち上野椽あり、豊竹新太夫あり、出水太夫等の名手あり。三絃に野澤喜八あり、人形に藤井小八郎、全小三郎、豊松藤五郎等あり、竹本座に竹本政太夫あり、同頼母、内匠理太夫、万太夫等あり、三絃に竹澤權右衛門あり、門人鶴澤友二郎あり、人形には吉田文三郎父子あり、津山等ありて、其競争漸く熱し、寛保延享の盛時を見るに至らんとす。

余輩こゝに大坂に於ける竹豊二座以外の状況を一瞥して京都に及び、次に江戸に及ぼし、再び大坂に歸りて眞の最盛期を説かんとす。

文彌節廢る

元祿より享保の初年に於て、竹豊二座を除かんか、大坂の地に數ふべきもの殆んどなし。暫く歌舞伎を除けば、天和貞享の頃より行はれて泣くが如くに語りし文彌節も、寶永年間に入りては古めかすと評せられ、道具屋吉左衛門ありて、時に金平を語りたりといへども、此人の師も時代も明かならず、元祿年中に絶えたるものゝ如し。其他、文彌の門より出でたる表具又四郎が、表具屋節あり、また又四郎節とも稱す。こは上品なる節付けなりきと傳はるのみ。其の他彼の豊後節の始祖、都國太夫半中の國太夫節は、享

表具屋節

國太夫節

からくり

保三年十一月竹本座に博多小女郎浪枕を語りてより、國太夫節と稱して漸次弘まりしがありしのみ。竹田近江のからくりは、亦一方に勢力ありしもの、如し。棠大門屋敷、又山本飛彈椽のからくりを傳へて曰く。からくり細工人は、小山五郎兵衛、其子山本彌三郎是を傳へて無双の名人となす。一筋の糸を以て大山を動かせ、小刀一本を以て形あるものを作りてはたらかしむ。別て水學の術を得、水中に入りて水中より出づるに衣服をぬらさず、僅かなるはさみ箱に船をしこみ、川水に浮けて用を達す。此儀叡聞に達し、禁庭に於て細工の術を叡覽に備へ、則細工人に仰付られ、山本飛彈椽清賢と受領し、翌年雨龍の細工をさし上げ、河内椽に重官任せ

らる。と

大門屋敷は、寶永二年の刊なり。然れども、一説に山本飛彈椽淨瑠璃名代御免ありしを、元祿十三年となせり。彼の竹本座の吉田三郎兵衛は、此飛彈椽より直傳を得たる者なりといふ。

第二節 京都の概況

宇治加賀、貞享三年義太夫と争ひて敗れ、怨を飲んで歸京せりと雖も、加賀の曲節は、最も京都人士の意向に投合し、他に角太夫あり、説教祭文の類ありきといへども、加賀の影だに踏む能はざりしなり。寶永の印本、松の落葉に、四條河原涼八景を載す。これ加賀の自作なりと傳へらるゝものなり。當時の四條河原を伺ふに足るものあれば、左に其

一部を掲ぐ。

四條河原の賑ひは、……音羽の山にこだまして、響く芝居の朝太鼓、茜さす日の赤前垂、すしにて立ちし賤の女が顔に會釋し、喃申、扎めせよ、いば、棧敷でも取てあげましよ、お羽織も、お笠も、杖も預りて、お茶は後から上げ申す。入りははやくも、早雲長始り。おあし干くわん萬太夫都万本年を重ねて繁昌の、かめやはくめの淨璃瑠は、かめや乗之丞なり、めでたいこくの加賀椽宇治加賀椽。サア扎めせとたきつくる、はがまのたきりりんくく。しやんと結ひし胸高帯、乗物のでかご所せき、紫帽子、御所姿、思ひくしの伊達姿、女中勝ちなる物見なり。扱又涼の夕景色。中略流れに續く水茶屋は、曇らぬ空の星月夜、天の河原もか

くやらむ。納る御代の太平記、或は平家物語、徒然草、辻談義、辻能をかしく柏子とり、謠かもの山なみ、みたらしかは、うつりうつろふ縁の袖。……祭文、拂ひ清め奉る、色の盛りは東なる八百屋の娘お七とて、戀路の闇のくらかりに、由なき事を仕出して。……歌念佛「さるほどに、世の中の人間の、めかの婆を見せんとて、花開て示す、まさ

に眞の智識たり。……下略

四條河原のみにて、早雲座あり、都座あり、かめやあり、加賀の座あり、太平記讀、辻談義、歌念佛、祭文、謠敷へ來れば、其賑はしさ、又吾人の想像し難きものありしならむ。此間に介立して、嘉太夫節加賀節と傳播せしめたるを思へば、たとへ義太夫には敗を取りたるにもせよ、當時の大立物、京

都唯一の者たりしを想見せざるを得ず。又之れと共に、志やんと結びし胸高帯、紫帽子、御所姿、女中勝ちなる物見には、彼のなよ／＼たよ／＼たる加賀節の適當したりしをも思はざるを得ず。

早雲、都の二座は歌舞伎の座にして、かつて近松が狂言作者たりし處なり。

歌念佛

歌祭文は、もと山伏の祭文より出で、歌念佛は佛教より起りしなり。殊に念佛の如きは、其始め更に淫けたる聲にはあらざりしを、其音調漸次に淫聲に流れて、終に念佛の字を汚かすに至りしなり。六時禮讃は、法然上人の弟子、安僧經文を集めて之れを作し、其後太秦善觀房、曲節墨譜を定めて聲明となせり。これ一念念佛の始にして、娑婆に念

佛つとむれば、淨土に蓮ぞ生ずなる願はゞ必ず生じなむ、ゆめ／＼怠る事勿れ、とは念佛の最終毎に唱へたるものなりしが、元祿上梓の人倫訓蒙圖彙には、

夫れ念佛といふは、万徳圓滿の佛號なり。然るを、それに節をつけて歌ふべき様はなけれども、末世愚鈍の者を導き、せめて耳になりと觸れさすべき權者の方便ならむ。夫れを、猶誤りて色々の唱歌を作り、鉦に合して淨瑠璃説教のせずといふ事なし。末世法滅の表しなり、哀しむべし、なげくべし。

といへり。天和の頃なりといふ、鈴木昌三、和解の字を用ゐて、三世因果の道理、無常迅速の法語を書き記し、洛陽壬生の里、林西といふ妙音の僧に與へければ、林西これに曲節

説教

をつけ鉦鼓に合せて、唱導せしに、諸人皆感涙を催し、歌念佛と稱して流行したりしが、元祿寶永正徳を経て享保に至り、享保の末年遂に衰滅せり。

説教は、なほ今の法義法談と云ふに同じく、元亨釋書、音藝部に、これを唱導といへり。藤原信西の七男澄憲僧都には、じまれり。嬉遊笑覽に、志保之理を引きていふ。

志保之里に、諸の講式より和讃は起りて、後世極樂院の鉢扣が和讃變じて、説教といふうたひ物に落ち、丹波金やき地藏、善光寺荳堂の故事本縁などの俗傳を作り、淨瑠璃となりし、矢作寺薬師の本縁を作りしより以來、戦場の様、佛神の靈を、様々年を追ふて作りし、近世の如きは、只管たはれて由なし事を作りて、昔の姿なく、中頃

の體に異なり。況んや、佛法は跡なくなりしといへり。

此説、淨瑠璃牛若の作の事をば、普通の説の如く心得たるは誤りなり。其餘は左もあるべし。今も何くれ本地といふ假名書本のあるは、皆な説教師の語りしものなるべし。因りて思ふに、淨瑠璃はもと薬師佛の本地を語り、後に牛若の事は作り出でたるものならむ。説教より淨瑠璃の起りたる事は疑ひなし。橘窓自語にも、上るりと云ふものは説教より出しものなるべしといへり。余思ふに、左許りにもあらず、平家をも取りしものなり。後の説教は、淨瑠璃を取れるか。

説教と淨瑠璃とは、其關係の密なる、或は此説の如くなりしならむか。後世に至りては、其櫓幕を張りて群衆を招き

五説教八祭
文

し事、彼淨瑠璃操と異なる事なく、正本を刊行し、章譜を示して世に弘めたる事も、又異ならざりき。享保三年、佐渡七太夫豊孝の正本、法藏比丘刊せらる。其他、小栗判官、熊谷山椒太夫、志田小太郎、伏見常盤等何れも六段物にして、其語る處は材を淨瑠璃と同じうせるなり。當時の、五説教、八祭文とは、

信田妻。 隅田川。 愛護。 津志王。 石塔丸。』

八百屋お七。 油屋お染久松。 大經師おさん茂兵衛。

額の小金五郎。 お初徳兵衛。 おちよ半兵衛。 お夏

清十郎。 お俊傳兵衛。』

これなりき。太宰春臺、獨語の中に説教を評して、

説教といふものは、法師の説法に因縁物語する類ひな

り。其物語は偽説に任せ、慥かならぬも多けれど、詞は昔の詞にて賤しき俗語を交へたる中に、やさしきことも少からず。其上、幸若の舞の詞の如く、昔より定まれる數ありて、何時も古き事のみを語りて、今世の珍らしき事を作り出さず。其聲も唯哀しき聲のみなれば、婦女之れを聞きては、そゝろに涙を流し泣く許りにて、淨瑠璃の如き聲にはあらず。三味線ありてより、此方三味線を合する故に、鉦鼓を打ちたるよりも少し浮き立つ様なれども、甚しき淫聲にはあらず。云は、あはれに傷るといふ聲なり、淨瑠璃に比べて少しまされる方ならむ、といへり。説教の類はたゞに京都に行はれたるのみにあらず。大阪にも、江戸にも、皆盛んなりきといへども、沾涼が

歌祭文

江戸砂子、世事綺談の類、説教を記す事なし。享保の末年には、歌念佛と共に衰退せしならむ。山伏の祭文語り之れを傳へたりといふ。

心中歌祭文

歌祭文は、山伏の祭文より變化したるものにして、神にあらず、佛にあらず、彼の兩部神道とも稱すべき、本據定かならざるものなり。始め錫杖を振りて讀みたりしを、後に小唄を交へて三味線にさへ合するに至れり。彼の儒道に於ては、人の死後、祭文を作りて靈前に誦讀す。兩部神道は、之れに倣ひしものか。神前に錫杖を振て、祭文を唱す。又之れになぞへて、愚痴の男女、偕老を心中に誓ひて相死するや、之れを吊ひ祭るとて、祭文を作り、錫杖を振りて唱ふるを心中歌祭文といへり。先の八祭文は、皆これ心中歌祭文なり。

加賀椽歿

り。
辻談義は、路上往來の繁き處を撰びて談義をなすもの、謠は、足利以來の式樂、此處に詳説するの要なし。太平記讀み、平家物語これ亦辻談義と同じく、多くは大道の片ほとりに人を集めき。されば最盛期の京都は、啻に淨瑠璃のみの盛時にはあらざりしなり。唯、加賀椽及ひ土佐椽は、雞群中の双鶴たりしのみ。土佐椽の歿年明かならずといへども、加賀椽は寶永八年即正徳元年正月廿一日七十七の天壽を以て京都に歿し、弟子富松薩摩名跡を相續せり。門人宇治伊太夫は、竹本若狹の芝居を繼ぎて、野田若狹と稱ふ、其他、立花河内、宇治相模、何れも當時に令名ありき。土佐の門、又彼の岡本文彌を出し、松元治太夫を出し、都一

松元治太夫

林和泉太夫

中を生めり。治太夫初名を菅野傳彌と稱す。貞享元祿の頃既に一派をなして治太夫節と稱せらる。始めは土佐の座にありて、専ら土佐或は播磨の古淨瑠璃のみを語りしも、後には自ら芝居を立て、新作を興行したるものなきにあらず。彼の宇治加賀が世繼曾我は、始めて人形に足を附したりと傳へらるれど、治太夫亦源氏烏帽子折興行の時、藤九郎盛長及び澁谷金丸の人形に、始めて足を附したるを以て鳴る。未だ其前後を知らず。其他、林和泉太夫あれども、其傳詳かならず。元祿の頃、近松の佳作、關東曾我を語れる事、聲曲類纂に見ゆ。都越後椽、又當時の人の如くなり、雖も其傳を知る能はず。一中節の系圖には、岡本文彌の次に置き、常盤津系圖に

都一中

は、都万太夫事都越後椽とあれど、初代万太夫は、歌舞伎芝居の座本たり。又其時を知る能はず。後の一中節常盤津節の生成に、多少の基をなしたることありしか。都一中は、もと京都東本願寺派の僧なり。弱年寺を捨て、土佐椽の門に入り、治太夫の流と和して一派をなせり。始め須賀千扑と號し、後都太夫一中と改む。一中節と稱して世に行はれしは、元祿寶永以後の事なりとす。延寶六年、土佐の座に助六の心中を語りて世に知られたるは、既に前に記せるが如し。なほ土佐の座にありて語れるものとして傳はれるに、傳授小町あり、椀久末の松山あり、菜種の花盛、彦三近江八景、お俊傳兵衛川原の心中等あり。此心中は、正徳元年の事なり。されば正徳の頃、一中はなほ土佐の座

國太夫半中

にありしならむ。享保八年九月京都に歿す。男を今一中といふ。江戸に下りしは、聳の金太夫三中なり。秀太夫千中及び國太夫半中其門より出づ。特に國太夫優秀地を抽んで、竹本座に出で、國太夫節と稱せられぬ。享保十五年江戸に下りし、宮古路豊後様とは、此國太夫半中のことなりけり。

一中が後年語りしもの、及び其門人等の語りしものは、何れも一段淨瑠璃にあらざれば、景事道行の類にして、竹本座の淨瑠璃を、其まゝに寫志、曲節を自流に改めて、語りたるものなりといふ。

最盛期といへども、享保以後に至りては、土佐の座もあるかなきかの不振に陥り、加賀の座も、元文三年の忠臣いろ

は夜討に名を取りたるの外、さしたる盛況はあらざりき。竹豊の二座、交々入京して、大坂の古淨瑠璃を、北野、四條、七の社の各地に興行し、毎年往返數回し、京都も亦義太夫節に聞きほるゝに至り、かくて竹本座は京都にも設けられぬ。されば京坂の最盛期全躰よりいへば、義太夫節最盛期なりと稱せんも不可なきに似たり。今や去りて江戸に移らむとす。

第三節。江戸の概況

淨雲一たび東下して四天王を出し、源太夫一たび西上して井上播磨、宇治加賀を出し、つぎて義太夫の出づるに及びては、關西の勢將さに天に冲せんとするに至りぬ。知らず、彼の淨雲が拓きたる江戸の地は、果して西に對して耻

る處あらざるか。

先に漸盛期の江戸を叙して、淨雲の末近江節を出し、肥前節を起し、永閑、土佐を生みたる様、恰も枝、枝を生し、藁、藁を生じたるの觀ありと評し置きぬ。最盛期、即ち元祿より寶曆初年迄の江戸も、亦頗る盛んなりき。貞享、元祿、寶永、正徳の上半期に於て殊に然りとなす。

承應、明暦に起りたる近江節は、貞享に絶えたりといへども、なほ肥前節の存するあり。永閑の操座堺町に人を集め、二代目薩摩次郎右衛門の門は薩摩外記藤原直政を出せり。其流、外記節と稱して世に行はれ、これ又堺町に操座を興行せり。土佐、椽橋正勝は、式部節と手品節とを生めり。廣瀬式部太夫と、手品市左衛門の語る處、何れも正勝の門よ

外記節

式部節
手品節

江戸節又半
太夫節

貞享元祿當
時の堺町

り出て、貞享元祿の頃世に行はる。後世江戸諸流の粹を鐘め、上品にして河東上下と尊ばれたる河東の節付は、手品、式部の二流に由來するもの多しといふ。なほ若山五郎兵衛の若山節あり。江戸半太夫の江戸節あり。半太夫もと説教祭文に長ず。肥前太夫につきて淨瑠璃を學び、遂に大成して一家をなし、諸流の長を採りぬ。正徳二年より堺町に操座を興行して、幾多の諸流と其盛を競へり。その江戸節と稱して世に流布せしは、貞享以來の事に屬す。半太夫正徳の頃、薙髮して坂本梁雲といへり。蓋し淨雲以來の名家にして、十河見河東は實に此門より出でたるなり。爰に少しく貞享以來の、堺町につきて記する處あらむとす。堺町海道東西に貫通し、南に江戸次郎右衛門、丹波和泉

薩摩太夫、土佐椽等の浄瑠璃芝居軒場を列ね、北には江戸孫四郎、天満八太夫相接して説教浄瑠璃をなす。中村善五郎、猿若勘三郎の歌舞伎これに隣し。猿若に隣りて虎屋源太夫の操あり。なほ説教座には、天下一石見椽藤原重信あり、佐渡七太夫豊孝あり、大坂七郎太夫あり。家々相接して櫓を高め、家の定紋櫓幕に著く、招く朝太鼓は四境をどよもし、木戸の呼聲勇ましく、貴賤老若群集して、其繁榮の程想察するに堪えたり。

轉じて葺屋町を見れば、都市村の二座あり。伽羅の油屋その間にありて、當時の若衆に満足を興へ、結城孫三郎は、又説教に人をつとへ、木挽町には對馬五郎左右門のあるあり。以て、元祿の世は物見遊山の最頂時たりしを知るに足る。

春臺の評

る。

太宰春臺の獨語に曰く、

寛文、延寶頃迄の浄瑠璃は、皆昔物語も演ぜし故に、詞やさしく綴りなして、あはれにをかしき事もおほかり。淫聲といひなから、忠臣、孝子、義士、節婦の事をいへれば、愚かなる小人女子も、是を聞ては感じ合へり。元祿の比より、稍ますく、俗になりて、淫靡の聲多し。寶永の頃、京の浄瑠璃師江戸に下りて、鄙俚猥褻なる浄瑠璃を唱へしより、江戸の人之れを面白き事とおもひて興しけるに、享保の初に、又難波の浄瑠璃師來りて、彼方なる俗調を弘めし程に、江戸の人いよくこれを好みて、江戸の舊き浄瑠璃をすて、只管に京、難波の浄瑠璃を習ふ。賤者

のみにあらず、士大夫諸侯迄も之れを好みて一節を學ぶ人あり。是に至りて、昔物語をすて、只今の世の賤者の淫奔せし事を語る。其詞の鄙俚猥褻なること云ふ許りなし。士大夫の聞くべきことにあらざるは云ふに及ばず、親子兄弟なみ居たる處にては、面をそむけて耳を覆ふべきことなり。されば此淨瑠璃盛んに行はれてより以來、江戸の男女淫奔する事数を知らず。元文の年に及びては、士大夫族は云ふに及はず、貴き官人の中にも人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にて姦通する類あり、いくらといふ數を知らず。これまさしく淫樂の禍なり。

儒教的見地に立ちて評せるもの、偏狹の感なき能はずと

風俗の類
は獨り淨瑠
璃のみの罪
にあらず

雖も、江戸淨瑠璃の變遷を説きたる處、又傾聽すべき價なきにあらず。春臺は、世の泰平なるに従ひて人情交替し、自然遊惰安逸に流るゝを考察せず、偏に以て淫樂の禍となす。固より風俗の壞亂を助長せしことはあるべしといへども、全く淨瑠璃の罪となすは、又當らざるなり。元祿以降に至りては、關ヶ原の亂に與りたるもの、既に歿して片影なく、其子の時代を過ぎて孫の時代に入りぬれば、世は漸次に轉變して武風消散し、大身と小身とを問はず、武夫の振舞夜咄の會合にも、誰れ一人武道武藝の詮義、刀脇差の物好、長短鍛方に説き及ぼすものはなく、花見遊山に槍持を伴はざるに至りては、諷、幸若に代ふるに、三味線、淨瑠璃を以てするに至るも、自然の勢なりとす。新見法入が昔々

物語を見るも武風の地を拂ひたるもの、強ち獨り淨瑠璃の罪のみにはあらざるを知るに足る。猶世と共に操人形の衣裳類に至る迄、變遷交替したる様、同書に詳しきものあり。曰く

昔は堺町の操、薩摩太夫、筑後、丹後、近江、肥前、永閑、操の淨瑠璃は、酒吞童子、或は贄、花車等、其外淨瑠璃の仕組み、初めは富貴に榮え、中の世に落ち、郎等忠をはげみ、義を立て親、主、兄の身代りに立ち、孝を竭し、義を専らとしてあはれなる事を交じへ、末には世に出で、又富貴に成てくらすを作り、誠に勇をみかく事もあり、哀なる事もあり、少しは身の嗜み、心つきの爲めにもなる。第一規式正しく、人形の拵様も、先大將の人形は、烏帽子直垂を着せ

て、郎黨には立烏帽子を着せ、ひたたれ素襖をきせ、女の主人には髪をすべらかし、かつら帯額にかけ、御臺には十二一重の小袖を着せ、男女共に規式正しく拵え、淨瑠璃始まる前に、先式三番叟を能の如くすまし、其次に人寄せとて和田酒盛一ながれ、前淨瑠璃にしてすまし、其跡にて其日の、本淨瑠璃を何にても初むる。道理至極したる事多く、又哀れなる所は涙止め難き程にて、義理詰まりたる處、又は働きかひくしき智仁勇の郎黨、讒言等にて不慮の處にては、覺えず齒をかむ。是を太夫も役者も手柄とす。近年の操、大將も大廣袖の伊達小袖、模様至極の伊達を盡し、淨瑠璃は、はじめより終迄、あるにもあらぬ色を盡し、人形の面、浮氣に拵え、相伴ふ郎黨等

皆廣袖大ひやく元はなし。髪女の人形は、御臺所と云ふも皆おやま人形、投島田の髪にて、小袖も伊達を盡し、淨瑠璃は始めより終迄あるにもあらぬ色を盡し、不届千萬なる仕組み、其上木に竹をつぎたる様に時代違ひ、有まじき處へ出まじきものを出し、ありと見れば行方も知らぬ様に埒もなく作り、道に違ひたる筋なき戀をつくり込めたり。是を幼少の子供、若き衆など見物して、よき事と思ひ、浮氣になき人迄そゝり立、大好色に成り、徳なき見物也。

昔々物語は、享保十八年の書なり。元祿以降、士氣大に改まりぬ。寛文延寶の當時を想起しては、老人の慨歎するに堪えざりし世の様、實にもと思ひやらるゝなり。然れども、文

江戸の女子
も三絃を弄す

藝は由來太平の餘業にして、世と共に變移するによりて生存するを得るものなり。其元祿化せられたる處、これ淨瑠璃操の世に行はれたる所以にして、適者生存の理、又如何どもする能はざりしなるべし。

先の若山節、手品節は短命にして、享保に入りては既に世に忘れられ、京都の一中、豊後、大阪の義太夫、此時相次ぎて江戸に入りぬ。

寛文の當時にありては、因幡が山入の一段、美人揃の道行等四段を覺えたればとて、名譽の女なりと持離したる江戸も、土佐節起りてより女中、奥方、息女等迄五段十段を語るに至り、家毎に絃々相和し、半太夫節行はれ、河東行はれてより聲々巷にとよみぬ。

十河見河東

河東はもと品川の豪家なり。藤十郎と呼び、河東と號す。志世利に拘はらずして嬉遊を事とし、産を破りて半太夫の門に入り、手品、式部の二流を加味して一家をなし、出藍の譽世に高く、江戸淨瑠璃の粹は、盡く彼に集冲せりと稱せらる。享保十年、四十二歳にして此世を辭せり。門人夕丈其家を繼ぎて二代の美をなし、河丈は河東の名を襲ぎて連綿今に絶えず。河東上下、外記袴、半太羽織に、義太股引、豊後可愛や丸裸とは、享保の末年世に行はれたる品評なりき。されど、義太の股引、豊後の丸裸は、最も世の歡迎する處なりしは、又其世を知るに足るものあるにあらずや。

義太夫節江戸に入る

獨語に、寶永の頃京の淨瑠璃師江戸に下るとあれど、初代一中は江戸に下らざりきといふ。義太夫の流は、享保の初

年より江戸に侵入せり。享保のはじめなりき、半太夫の座まさに退轉せんとして、僅かに紀伊國や文左衛門の保護を受け、辛ふじて一時を支えたりと雖も、辰松八郎兵衛の東下するに及びて、辰松座となりぬ。辰松は竹本座にありて、令名ありし人なり。自ら江戸の座本となりては、大坂より太夫を聘し、義太夫節の傳播に力む。かくて大坂の太夫比年江戸に下れり。京坂におきては、寧ろ二の町にも置き兼ねる者すら、一たび江戸に来るや、彼の色芝居が、正徳年間、何時も上方からといへば、女形をもてはやし、京でくはれぬ赤べたの、昨日迄、腰元役、さては御姫様にしてのけて置た撰屑を、一枚看板にして、云々と評したるをも、適用し得る程なりき。彼の竹本國太夫、豊竹、島太夫、染太夫、倉太夫

豊後節

大薩摩主膳
大夫

竹本勘太夫、佐内等大坂に於ては、いまだ兎角の評のみ受けて、未熟の圈内に置かれたるものすら、一たび江戸に来るや、一枚看板いかめしく、やんやの喝采を博したりといふ。

一中の門人、國太夫、半中、即ち宮古路豊後の江戸に下りしは、享保十五年の事なりき。はじめ葺屋町川岸の小芝居を勤め、十九年堺町の中村座にて譽れをなしてより以來、豊後節の勢凄まじく、江戸の諸流を壓伏するに至れり。之れより先き、正徳年間より、半太夫、永閑、初代河東等、歌舞伎芝居に出で、役者の所作に合せて語り、各其流を擴布するの一手段となしたりしが、享保に入りては、豊後節來りて之れに加はり、大薩摩主膳太夫、又外記の門人、佐内の門よ

豊後節禁せ
らる

り出で、享保十四年中村座に出勤し、爾來家の藝となせり。勇士の出端、荒事等には、其他の諸流の及ぶ處にあらずりきといふ。

豊後の語る處、春臺が鄙俚猥褻なりと賤んじたるそれにして、男女の痴情に關せざるはなく、去かも江戸に容れられ、これが爲めに手を携へて出奔するもの甚だ多く、元文四年遂に官の禁ずる處となりぬ。江戸節根元記は、宮古路の曲節流行りて、色事、欠落の數を増したるによると傳ふ。享保七年の事なりき。幕府令して世上の噂、男女情死の事を記して板行するを嚴禁したれども、此年淫奔の數を加へて、一世の風潮如何ともすべからざりしなり。當時に際して來りし豊後節の行はれ、從て其影響の大なりしは、敢

て怪むに足ざりしなり。これ享保五年江戸の歌舞伎三座何れも彼の大時代を棄て、お房徳兵衛の十七回忌なりとて、重井簡を興行し、大盡舞の行はれたる、享保の當時にあらざや。豊後節を語る遊女、京より下れば、萬客晝夜を争ひたりといふ。永井丹波守、京都の町奉行を拜せし時、腕をさすりて曰く、我等京に上らば豊後節を停止すべしと、意氣を満身に込めて上りたれど、時勢如何ともすべからず、遂に制し難かりきと、賤の苧環は傳ふ。一世の風潮は到底禁令の防止し、得る處にはあらざるなり、豊後節の淫猥を容れ、喜んで同化したりし當時の人情は、元文四年の一禁令と、次ぎて豊後椽が情死せしとによりて變ずるものにはあらず、世人常に豊後節の再現を思ふや、こゝに常盤津

常盤津節

節の起るに至れり。常盤津文字太夫に出づ。豊後椽の實子なりとも、門人にして後養はれたりとも傳ふ。京都寺町の人なり、駿河屋文右衛門といふ。元文の始め江戸に下りて、宮古路文字太夫と稱す。四年の禁令に逢ひて後、延享四年關東文字太夫と稱す。關東の文字亦官の禁ずる處となりて、常盤津と改め、一流をなせりといへども、詞章は多く豊後椽のものを襲用せり。此流又世に流布し、豊後の流風は名を改めて又盛んなるを見る。

元文、寛保、延享、寛延、凡廿年。此間は實に大坂に於て、操繁昌の最頂なりき。此時に及びては、京坂の名手又屢、江戸に下れり。寛保元年には豊竹越前少椽等一座作者並木宗輔を伴ひて江戸に下り、肥前座に興行すること九ヶ月の長き

各流の衝突

に及べり。加ふるに、延享三年江戸に大火ありて、操座悉く類焼し、再興容易ならざりしより、陸續として大坂より入り來り、義太夫節の盛んなること、従前に比なし。然れども、世を組織するものには老幼男女あり、各嗜好を異にし、半太夫に凝るもあり、河東を尙ふあり、力を義太夫にいたすものあり、豊後に現をぬかすものあり、元文の初年は實に幾多嗜好の衝突より、満都の人士各相反目し、座興談論の果ては相隔心するにさへ及べりといふ。淨瑠璃三國志の記する處、よく當時の衝突を傳ふ。

先づ近年は語齋、式部太夫などの音聲全くすたり、爰に淫聲第一の流を汲む木地（文字）太夫といふものあり、元祖宮古路に五割ましの淫聲なれども時なるか

な世上の人此淨瑠璃に販すること、大半なり。頃は珍文（元文か）元年仲秋の頃かとよ、良觀といふ僧深く彼淫聲をにくみ、自下手談義と卑下して正聲のすたれたるを興さんと、専ら衆生をすゝめられしとなり中略彼良觀歸依の佛右衛門、良觀が口うつしの法談して聞かせんと、宮古路の一流散々にいはれし事など話せば、側らに聞き居たる箔兵衛も得道して、成程私が若い時はやつた外記節や、土佐節を聞ては、今の淨瑠璃はあんまり利口で、さばけ過ぎて、昔の耳からは耻しくて聞かれず。又土佐節は分なものじゃ、聲は梁の塵を立たしめ、節は利休の茶杓よりも志ほらし、といふに違はず、それを知らぬものは、土佐節は軍許り

と心得、荒いものじやといふは大きな了簡違ひ。長門太夫、式部太夫などは、軍計多く荒いもので御座る。誠に土佐節は、上下で立派な物、惣躰江戸節は、おやぢの娘のと分けて、聲色をつかはず、世事を離れて、溫和の者じやといへば、家の子判吉は、豊後節の方で、餘程語るものなれば、イヤ、箔兵衛殿上下で語るを、餘り自慢せらるゝな。此方はつひに芝居も、淨瑠璃の會も見ぬか、凡出語の分は皆上下で語る。すでに、兩國や宮地などで出語りするにも、おらが節は、自慢じやなければ、簾をさらさらと上げると、上下着て見臺を前へつき出して一禮し、扇を構へて語り出す。外の淨るりは、こゝろは、しませぬ。なんと立派ではあるまいか、半太夫節

などや、河東節は、隠居してもよい頃………番頭の帳九郎、こたへかね、たとひ床の内に大肌ぬいて語つても、義太夫節は、根がよい、淨瑠璃なれば、人が受取る。面白くさへあれば、内證の不行儀は、目につかず。なんぼ立派じやというても、上下が居ねば、山猿の冠者。ほんに自慢でなければ、今、義太夫節をちと習ふて見やれ。先語る語らぬは、ともかくも、文句を讀むばかりも、學問になる………杉之助は、河東節を習ふて、諸事魂膽のみ、こんだ者じやが、此、自慢を聞きて、ちといひ、ふせ呉れんと、番頭をつきのけ、なんと、學文と義太夫節と一つにならうか。又、儒者の醫者のといふものが、豊後節語るは、醜し。ちと酒機嫌か、色氣のある

座敷では、半太夫節か、河東節とこねばうつらず。しかし京大坂は其國風故、皆河崎音頭歌、義太夫と土地相應に樂むからは、江戸に住むものは江戸の節を語るが氏神への云譯、……愚痴らしく、理屈や、心中に節付したを語りては、風雅の場は少しもなし……判吉又進み出で、それは旦那の了簡違ひ。豊後節のなまくら太夫どもが語るを聞きて一途に悪くいはぬもの。木地太夫などの淨瑠璃を御き、なされて御ろうじませ。又面白いものだ。此節を習へは道樂になるのなんのといはるれど、神佛くさい親父などが、娘に習はせそうもないものだといへば、側より武士右衛門といふおやぢ。

私も今十七八の娘を持て居ますが、娘が十歳計りの時分に唄がいふには、女の子のありつきは無面目では行かず。縫針は勿論なり、しつけ方、手習、琴、三味線とこねば第一御奉公の口がないといふ故、そんなら半太夫節習はせうといへば、かゝが云ふには、今は兎角豊後節でなければ御奉公の口が遠く、此頃も半太夫節語る女の子と、豊後節語る女の子と一所にさる所へ目見えに行きしに、豊後節語る子は其日にすんで、半太夫節語る子は目見えもせず返へされたりなどといふ故、何にもせよ、早く能い衆の中をも見せたいと思ふて、近所の師匠へ上げて豊後節を習はせる内十四五になると、ほんに血で血を洗ふ様なれどさん

げの爲めに話しませう。つひ近處の息子とちくり合ひ、何時か孕みし故、どうしてくりやうかと思ふたれど、親の慈悲で又了簡して見れば、おれが豊後節を習はせたが悪かつたとあきらめ、もう奉公にも出さず、今迄錢かね入れて習はせたが何の役にも立たず、是程馬鹿な目に逢た事はござりませぬと、眞顔に成て話せば、判吉又進み出で、ヤイおやぢ已れが娘の根性がろくでなく、道落したを上るりのどがになぜした。外記や、土佐が流行つた時には、道落者はなかつたかめつたな事ぬかすと踏みのめす。高が此家に居まへと思へばよい。江戸中の白壁は、皆旦那じや。何處へ行つても、身に替へても、豊後節はひいきするといふを、都

丹中(都一中)といふ人、松左工門が女房に好かれて、二階で淨瑠璃語て居られしが、下にけんくわがあると聞付け、半分頃から仕舞つて下へおり、是はどふしやと押しかけて、段々様子を聞く處へ、松左衛門が呼びにやりし判吉が請人末吉飛で來り、判吉が存外段々わびても聞かばこそ、直ちに暇を貰ひける。丹中はつくづく判吉が淨瑠璃に執心なるを見込み、あれ程でなければ太夫號はとらるゝものでなしと、判吉に向ひ、成程此方の存外は悪けれども、もどが淨瑠璃をひいきに思ふからじや、とても此家を出るものならば、此方の尻をれれがもつて、名のある人と木地太夫と勝負をさせ、貴様の存分にして遣ふ。はて私しも都

の字を名乗れば、木地太夫は子分なり。共に力になつて、名をば常盤の末永く東路に上げさせん。併し外で勝負しては内證の藝になる。諸流の専ら入り集る中の町での晴勝負と、判吉、末吉諸共に暇乞して立出れば、……番頭帳九郎、息子に向ひて云ふ様は、所詮置くも心外なり。私は喜太夫、義太夫が方へ行きて此事を語るべしといへば、息子は成程とおやぢにかくして一勝負、土佐様を大將とし、伊記、外記、波東、河東、番太夫、(平太夫)酒宴太夫、(主膳大夫)に至る迄、微塵もひけは取らずまじ。夫れ迄は番頭とも敵同士とにらみ合ふて入りにける。

下路

三國志は、寶曆年間、音同舎の著し、處のものなり。これによ

豊竹肥前様

りて元文、寛保の當時を窺ふに足るべし。義太夫の流に至りては、先にも記せるが如く、享保の初年より陸續入り来れりといへども、豊竹肥前様の東下を以て、江戸に堅壘を築きたるものと稱すべし。肥前様は大坂の人なり。豊竹若太夫、即ち豊竹越前少様に學び、新太夫と號す。始め道頓堀の豊竹座を勤めて、享保十九年江戸に下り、若松丹後様の名代を以て興行し、側ら葺屋町の辰松座に出勤せり。堺町を相して新に芝居を設けたるは元文年中のことにして、芝居の主と、座本と、太夫との三を兼ねて世に稱せられし人なり。延享以來の看板は、人形の招きを出したりしが、大芝居の如く繪看板に改めたるも此人に始りたりといふ。多くは大坂淨瑠璃の新作を傳へ來りて

之れを語り、一二の太夫は常に大坂より下り來りて當りを肥前座にとれり。延享四年、大坂の竹本座より傳へ來りて菅原傳授手習鑑を興行したりし時の如きは、百餘日の大入大當りにして、市中の手習師匠に切落札送りし事、神田紺屋町に屋敷を求めしに、此興行の餘慶なればとて、人は之れを菅原屋敷と呼びし事、又は冥加の爲めにとて、龜井戸聖廟の側に紅梅の社を建立せし事の如きは、世の久しく傳ふる處なり。其後大坂より下りし伊勢太夫を養ひて肥前と稱せしめ、自らは丹後となり、後又改めて宮内と稱して隱栖したりしが、芝居繁昌せざりしを以て、再ひ肥前となりて小野道風青柳硯を語り、大入を取りたりといふ。寶曆七年正月五日江戸に歿す。伊勢太夫間もなく豊竹

東治を養ひ、肥前を辭して大坂に上れり。

爰に余輩は東都の最盛期を略述したれば、轉じて大坂最盛期の後半を見んとす。江戸の概況を記して、淨瑠璃の作と作者とに説き及ぼさず、某の年、某の月、某座に此興行ありきと詳説せざる所以のものは他なし。段淨瑠璃の新作甚だ稀にして、多くは大坂の淨瑠璃を傳へ、或は其一段一切をぬきて語りたるに止まればなり。土佐椽正勝が六段物の如きは、何れも其作者明かならず。唯塚原市左衛門、江戸半太夫の爲めに筆を執り、岩本乾什、河東の爲めに草したるを記すに止めんとす。寶曆年間、文鐘軒、吉田盛紅等一二の作なきにあらずと雖も、左迄取出づべき價值あるにあらず。平賀源内、紀上太郎、松貫四、容揚、黛等の輩出して、江

戸の作、又尋常ならざるに至りしは、明和以後の事なりけり。

第四節 大坂の盛況 其後半

享保年間竹本座の概勢

享保九年、豊竹座女蟬丸興行に大入を取りてより以來、漸く西の竹本座と對抗の勢の得るに至れり。同年竹本座にては巢林子を失へりとも、竹田出雲よく其作意を傳へて大塔官囃鏡に好評を博し、享保十年大内裏大友眞鳥を出すや、四段目兼道の身替り、古今の趣向なりとて大當りをどり、十二年七小町を出し、十三年加賀國篠原合戦を作り、五月廿三日を以て其初日とせり、正面の床を横に直したるは此時なりき。十四年には、長谷川千四と共に尼御臺由井濱出を合作せり。千四はもと大和國長谷寺の僧なり。還

長谷川千四

俗して浪花に來り、筆を竹本座の爲めに執れり。其作多く享保年間に係る。京土産名所井筒(享保十四年竹本座興行)殊に名あり。

十六年の鬼一法眼三略巻は、文耕堂及長谷川千四の手に成り、十九年蘆屋道滿大内鑑、出雲の筆になりて、竹本座に現れぬ。當時人形遣の技漸く進みて、大内鑑の時の如きは、與勘平、彌勘平の木偶の左足を外人に遣はせ、其腹を働かしめ、三人して操るに至れり。比年必ず三四の新作を興行して、毎回多少の入不入はありきといへども、其盛んなること先の漸盛時代の比にあらず。享保廿年二代目義太夫受領して竹本上総椽藤原喜教と稱し、元文二年再び受領して播磨少椽と改む。

二代義太夫受領す

享保年間豊竹座の概勢

轉じて豊竹座を見んか、海音早く退けりと雖も、西澤一風並木宗輔、安田蛙文等と毎年二三の新作を出し、享保十一年四月、近松の作、西明寺殿百人上臈を増補したる北條時頼記を出すや、非常の大入にして、五段目雪の段出語り、出遣には上野少椽シテとなり、出水太夫脇を勤む。野澤喜八は三絃を弾き、藤井小八郎等人形を操れり。其勢竹本座を屏息せしめ、竹本座は六月を以て南堺に下れり。十二年竹本座に出雲の作三莊太夫五人嬢を出せば、豊竹座は又攝津國長柄人柱を以て之れに抗し、十三年には南都十三鐘を以て竹本座の篠原合戦と盛を競ひ、十五年の楠正成軍法實録には和田七の人形に眼の動く事を工夫し、十六年十月上野椽上京して禁裏に召され、孫庇の下にて叡聞に

豊竹上野少椽越前少椽となる

元文次來の竹豊二座

備へ、櫻町院の御感にあづかりて、越前少椽の敕許を蒙り、藤原重安と稱す。爾來連年新作を興行せし事、竹本座と異なることなく、作者は何れも並木宗輔、安田蛙文等なりき、十八年の忠臣金短冊は、宗輔の筆にして翌廿年入りて中村座の鎧櫻故郷錦となれり。これ彼の四十七士の事蹟を作れるものなり。豊竹新太夫(肥前椽)此時江戸に下りぬ。上に略述したるが如く、享保年間の竹豊二座を比すれば、左迄の優劣を認め難しといへど、元文以來は更に對等の地位に進めり。西竹本座に播磨少椽あれば、東に越前少椽あり、西に内匠太夫、百合太夫、此太夫等あれば、東に出水太夫、河内太夫、湊太夫等のあるあり。三味線の竹澤東四郎、野澤喜八は、西の竹澤權右衛門、鶴澤友二郎等に對し、

西に人形の名手、吉田文三郎の父子あれば、東に若竹東二等ありて互に其技を競ひ其妙を争ふに至れり。元文二年、竹本座に御所櫻、堀川夜討出で、豊竹座に釜淵双級巴出でぬ。四年平假名盛衰記、竹本座に全盛を極むれば、豊竹座は建仁寺供養を再演して相争へり。なほ寛保に入りて豊竹座は久米仙人吉野櫻を出し、海老藏の鳴神上人をうつして好評を博せり。延享となりて、元年播磨少椽病歿するに及び、竹本政太夫、島太夫、紋太夫、百合太夫等各其技の高下によりて、役場を定め、東越前少椽の老功に對す。

爰に注意すべきは、先之最盛期の前半と異りて、淨瑠璃の作漸く數人の手に合作せらるゝに至りし事これなり。享保八年、竹田出雲、松田和吉、文耕堂と共に嚙鎧を作せる事

竹本播磨少椽歿

の合作の風起

其始めなるべし。かくて、西の竹本座に、出雲、文耕堂のあるありて、長谷川千四之れに加はれば、東に一風、享保十六年歿なほ存し、並木宗輔、安田蛙文を卒ゐて之れに對し、享保の末年より三好松洛、淺田可啓、出雲の子小出雲等出で、西の爲めに起てば、東には並木丈輔宗輔の門より出で、加はるあり、元文に入りて爲永太郎兵衛の立つあり、淺田一鳥、豊田正藏等皆力を豊竹座にいたし、東西各奇を弄して新を競ひ、互に觀者を争奪せり。彼の平假名盛衰記の如きは、實に文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒、竹田出雲等五人の筆に成れり。各持場を引受けて想を構へ、人の意表に出でんことをのみ力むるに至りぬ。これ彼のぬき本と稱して趣味ある一段を撰ばしむる基をなせるも

のにして、巢林子、海音等一人の筆に成りし當時と比しては、統合の致なく、時に支離滅裂に陥る事ありきといへども、又よく人形の技に應じ、操に上せて支吾牴觸を見ることなく、各種の事件人物相合して、其趣味漸く單より複に入りぬ。

延享の當時

延享年間の隆盛は實に驚くに堪えたり。二年夏祭浪花鑑、竹本座に興行せらるゝや、其勢歌舞伎をして引退せしめ、芝居表には數百本の幟、朝風夕風に翻り、其他の進物等數へ難き程なりきといふ。淨瑠璃譜、此興行を傳へて曰く

此芝居は、竹本座始まりてより以來世話物九段續の始にして、頃しも暑氣の比なれば、四、目より八、目迄、始て人形に衣裳帷子を著せたり。これ吉田文三郎の趣

菅原傳授手習鑑

向にして、七冊目長町裏の段、本どるにて人形に水をかくる事を思ひつきしも文三郎なり。此人操にかけては、人形を持ち出れば人の如く、此時には、團七九郎兵衛、一寸女房おたつを使ひた、たつの姿、今なほ歌舞伎にても、桔梗の帷子、黒縹子の前帶、淺黄の綿帽子より外を見れば、おたつの様に見えぬも不思議云々
以て、吉田文三郎等人形遣の工夫が興りて力ありしを知るに足るべし。かくて延享三年竹本座に、菅原傳授手習鑑あらはれ、四年には義經千本櫻の興行せらるゝに至れり。手習鑑は、三好松洛、並木千柳、竹田出雲等三人の筆に成れり。三段目の道明寺は、松洛の構ふる處にして、櫻丸切腹は、千柳の筆。四段目の寺子屋は、竹田出雲の作せし處なりき。

古今の大當と稱せられ、興行年を越えて猶盛んなり。此時吉田文三郎、菅丞相、白太夫、千代の三役を勤め、桐竹助三郎五段目の時平を操り、桐竹門三郎は花王丸を、山本伊平次は女房八重山をつかへり、淨瑠璃譜又此興行を傳へて詳しきものあり。曰く

天満宮の宮居を正面に飾り、鳥居、玉垣、石燈籠も細工の美を盡し、社の内には菅丞相の人形をかざり、竹本此太夫、竹本島太夫、竹本政太夫、其外の太夫は何れも神主の姿に出立ちて拜をなし、數多の見物賽錢を上る事山の如くなり。……文三郎、又菅丞相の人形を遣ふに、毎朝別火を食し水をあびて之れを勤む。樂屋にても丞相の人形は荒薦を布きて御酒を捧げ、神の

如くに拜をなせり。大序を勤むる太夫の如きも、初日より七日は謹慎すること文三郎の如く、自然舞臺は早朝より嚴重なりき。云々

當時操座の役者、上下合せて五十人に達せりといふ。殊に天満宮の信仰厚き大坂の地なれば、大入の程思ひやらるゝなり。かくて大評判江戸に達し、豊竹肥前の座より人形遣吉田清次郎と、太夫竹本伊太夫とを上らしめて實地を見聞せしめ、更に竹本座の太夫人形遣數名を伴ひて江戸に歸り、翌四年二月を以て興行を始むるや、江戸古今の大當り百有餘日に亘り、三月市村中村の兩座これを歌舞伎に上せて大喝采を博したりき。

義經千本櫻

千本櫻、又出雲松洛千柳の三人に成る。これ又非常の大入に

して、文三郎が銀平、彌左衛門、忠信の三役其妙に迫りて驚嘆せしめし事、先の手習鑑の當時の如く、文三郎が工夫の源九郎狐が源氏車の紋所、今に傳へて此紋なき時は狐めかずと稱せらるゝ迄なり。翌年五月江戸の中村座又千本櫻を興行せり。

假名手本忠臣藏

驚くべきかな、翌寛延元年秋、竹本座又假名手本忠臣藏を出して、連年大入大當威勢ならぶものなく、歌舞伎は只管操にならひて仕組を立つるに至れり。忠臣藏は八月十四日を以て其初日とす。千本櫻につぎて興行せらる。又出雲、千柳、松洛の作に係る。抑赤穂事件たるや、其事小なるに似たりと雖も、元祿時代士氣銷沈の夢を破りて義を天下に示し、臥薪嘗膽して漸く所志を遂げ、以て亡君の鬱憤を晴ら

したるは實にとりて材となすべき恰良のものたるべし。松の間の刃傷の翌年即ち元祿十五年、江戸の歌舞伎に於て之れを演じたるを始とす。忠藏類聚(西澤一鳳編)の載する處のみにても、その數四十七種、又其屢々仕組まれたるを知るに足るべし。寶永三年、巢林子の筆に成れる。碁盤太平記は操に仕組みたる始めにして、足利時代となし。高師直、鹽谷高貞、大星由良之助の名既に此内に現る。享保十八年並木宗輔之れを小栗横山の時代に編めば、廿年中村座に入りて、鐘櫻故郷錦となりし事、既に前に説けるが如く、元文三年七月京都に忠臣いろは夜討成り、九月江戸の市村座に入りて忠臣いろは軍談(津打治兵衛作)となれり。寛保元年九月には並木丈輔の粧武者いろは合戦出で、延享

三年七月大坂角の芝居に於て大矢數四十七本(並木永助作)興行せられ、名優澤村宗十郎等之れを演ず。此狂言最も名高くして出雲等が忠臣藏の七段目は、此作意を其儘にとれるものなりといふ。

竹本座の興行中も、めあひありて此太夫、島太夫、百合太夫等東豊竹に轉じ、政太夫、錦太夫等東より西に来るが如き騒きありきといへども、五月にわたりて興行せしは、此淨瑠璃の作意一段とすぐれたるによるべし。翌二年江戸の市村、中村、森田の三座相共に忠臣藏を興行して、何れも大入をとり、手習鑑と忠臣藏とは、毎年一二回づゝ繰返へさるゝに至れり。淨瑠璃譜は、古いくといひく、見物も見るとは忠臣藏なり。是れより後、忠臣藏の増補數々、新淨瑠璃出

れども、古元の假名手本にまさりしはなし。扱々奇妙の淨瑠璃なるかなといへり。

加ふるに、戀女房染分手綱の興行も寛延四年なりしを思へば、延享寛延は實に操全盛の時にして、わけて竹本座の全盛時代なりき。去つて豊竹座につきて見る處あらむとす。

前に鳴神上人をうつしてより、爲永太郎兵衛等遊君衣紋鑑を作り、詩近江八景を出したれども、左して世を傾くるに足らず。北條時頼記を繰り返して越前少椽は一世一代を勤め、漸く退隱せんとする時、手習鑑竹本座に現はれぬ。同年豊竹座にて興行せし、花筏巖流島又左迄の大入もななく、延享四年悪源太平治合戦の興行に、おやま踊、雀踊をは

容競出入湊

じめたれども世の注意をひくこと薄く、千本櫻西に盛んなる時、歌舞伎黒船の狂言を移して容競出入湊を出せり。並木丈輔、浅田一鳥等の作る處にして、多少頽勢を翻したりと雖も、素より西と對等の勢はあらざりき。次て西に忠臣藏の出つるに及ひては、東たるものは、世話物わけても實際に於て觀客を分たざるべからず。折しも北の新地に全盛を誇りたるかしくといふ者、さる人に引かされて名を八重と改め、天満老松町に住す。八重酒癖あり。兄古兵衛之れを戒めて、八重に手を負はさる。八重直ちに入牢し、獄門のあさましき身となりぬ。此時南新屋敷の女郎園、大工の丁稚上り六といふ者と心中す。同時に又神崎に於て御駕籠の十右衛門、多くの馬子と争ひて手を負せし事あり。

八重霞浪花濱萩

これ寛延二年三月十八九日の事なりき。豊丈助、安田蛙桂、浅田一鳥等精勵筆を走らし、二十日に八重霞浪花濱萩と外題看板を掲げ、廿六日を以て初日とするや、前代未聞の早業なりとて、近國の者迄打つどひこゝに始めて古今の大當りをとり、七月下旬まで打通しをなすに至れり。さりとて西の手習鑑、千本櫻、忠臣藏、相次ぎてあらはれし當日の勢には似るべくもあらざりけり。

並木千柳歿

先に寛延元年には、内匠太夫受領して竹本大隅椽と稱し、二年豊竹此太夫も又筑前少椽藤原爲政と受領し、三年には並木宗輔五十七歳にして病歿せり。宗輔通俗を松屋宗助といへり。西澤一風の門より出づ、はじめ田中千柳と稱す。大坂の人なり。享保以降、常に豊竹座の爲めに作し、蒔萱

桑門築紫蝶、釜淵双級巴をはじめとし、丹羽山田青海劔、一谷嫩軍記最も名あり。延享年間、出雲、松洛と共に竹本座の爲めに作して、偉功ありしは前に説きたるか如し。

以上略述したる延享寛延の當時は、最盛時中の最盛時とも稱すべくして、竹豊二座の競争甚しく、作意に於て互にまさらむと力めしは固よりの事にして、舞臺、人形の美を盡し、大坂市中又分れて東と呼び西と稱へ、多少の弱みは豊竹座にありきといへども、二座の併立は操の全盛を來たさしめ、竹豊故事(寶曆六年刊)をして次の如く記さしめぬ。

竹本豊竹の流義は時に合ひし淨瑠璃といふべし。其證據は古代に流布せし江戸の薩摩、土佐、外記、半太夫の流、京都の山本、宇治、一中などの節、大坂にては伊藤

竹豊二座の競争

出羽椽座の文彌節は、諸國の浦々隅々迄もはやり、遠國邊土の西國順禮の最中、京都にては御内裏様、大坂にては出羽様の芝居を見て歸へらねば、西國したるかひもなく、死ては閻魔大王の前にて申譯のなき様に有りがたがりてもてはやしけるに、今にては其名さへなくなりぬ。勿論、冷泉、網戸、平家、説教、歌念佛、歌祭文などいふものは聞き知りたる人も稀々にて、只兩竹氏の流義のみ諸國一圓に流布せるは、當流の大きな矩模といひつべし。猶又古來の淨瑠璃は、文句短く、唯有邊懸り成事にて左のみ切替つたる趣向もなし。操道具も粗末なる仕方にて、大方は黒幕と山簾とにて仕舞ひぬ。人形の衣裳は銚泥の摺込模様、女人形は

紅の表に淺黄裏などにて事足りぬ。元來足付け人形などは曾てなかりし事なり。其後操芝居次第に繁昌せるにつき、道具、建衣裳等向上に成別して竹本豊竹兩座となりてより、東は西にまけまじ西は東に勝らむと互に勵み出來、益芝居繁榮し、淨瑠璃の作者は種々様の趣向を工み出し、道具建にも金銀を惜まらず金襖にて舞臺を暉かし、或は數寄屋懸りの粹成思ひ付、智恵袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬、緞子、縹子、金襴等にて美麗を盡し、詰人形の外は皆々足つけとなり、出遣の外は介錯足つかひ、立懸り、歌舞伎役者の所作よりまさりて天晴見事なり。併し西か東か一座計にては、斯く繁昌もせまじ。當時は町中の若衆、豊竹

實曆年間竹
豊二座の比
較

講の竹本講のと號し、毎月掛錢をあつめ置、替り淨瑠璃の節、進物の入用に仕たまふとかや。扱て奇特千萬なる御心中、益、信仰なさるべし。

かくて實曆に入りぬ。實曆は寧ろ豊竹座の盛時なりき。老功圓熟せる豊竹筑前少椽藤原爲政あり、優艶絶妙と稱せられたる豊竹若太夫あり、幽玄至妙と評せられたる駒太夫あり、三絃に妙手竹澤文五郎あり、鶴澤重次郎あり、人形には豊松藤五郎、藤井小八郎、全小三郎、若竹東二郎等の打揃へるあり、作者には並木宗輔を失ひたりといへども、淺田一鳥、並木永輔、安田蛙桂、難波三藏、浪岡黒藏主等のあるありて、實曆の初年はともかくも八方揃なりき。然れども轉じて竹本座を見れば、音節無双とはやさる、竹本大和

一谷嫩軍記

椽藤原宗貫あり琢磨至り盡せる政大夫あり風雅の調に勝れたる錦大夫あり、三粒には彼の友二郎なしといへども大西藤藏の明廉なるあり、竹澤甚三郎の晏如として其功を恣にするあり、人形には吉田文三郎あり、桐竹助三郎、全門三郎、作者としても竹田出雲、三好松洛の二傑あり、近松半二出で、又之れに加はり、吉田冠子も漸く與るに至りて、相比すれば六分の重みは竹本座の有なりき。されども豊竹座としては寶曆年間程盛んなるはなかりき。

元年十二月、一谷嫩軍記を興行す、並木宗輔の遺稿にして、淺田一鳥等の完成したるもの、非常の大入にして翌年十二月迄興行を持続す。拾年江戸の中村座に上れり。次きて倭假名在原系圖を興行すれば、これ又中村座に入れり。六

祇園祭禮信仰記

竹本座の内証

年の義仲勳功記には、大切に亂菊枕慈童を出し、藤井小八郎の出遣、座中惣太夫の出語り花々しく、七年十二月に至りて、祇園祭禮信仰記を興行するや、非常の大入大當、三年越を持続して其興行期の永かりし事、竹本座の國性爺に接し、遙かに千本櫻、忠臣藏に抽んづ。爾後豊竹座の興行せしもの數十番に及べりと雖も、其盛んなりし事、信仰記に越えたるはあらず。

竹本座又寛延當時の勢なしと雖も、寶曆四年小野道風青柳硯を出し、太平記菊水巻を出せり。殊に十一年の古戰場鐘掛松の興行には、これを五千兩金借待と異名を附せらるゝに至れり。爰に余は其異名を説くに先ち、聊か竹本座當時の内証を窺はんとす。

寶曆六年十二月を以て竹田出雲椽清定病歿し、竹田近江代りて座元となりぬ。竹本座の勢は敢て衰へたるに非ずといへども、漸く裏面に事は起らんとせり。先に屢々其技を稱したる吉田文三郎によつてなり。文三郎は彼の山本飛彈椽より直傳を得たりと稱せらるゝ竹本三郎兵衛の子にして、其技優に當時に抽んで、其工夫身振多くは歌舞伎も之れに倣はざれば、其眞に迫る事難く、又看客に満足を與へ難かりきといふ。其技の秀絶なると共に、當時の文三郎は、實に淨瑠璃の出來不出來に係はらず、竹本座の興行に欠くべからざる唯一の人なりき。享保二年國性翁後日合戦に始めて出座し、錦しやの出遣片手にての晴業、年若けれど流石に親、三郎兵衛の子程あり、後々は天晴の役

吉田文三郎

者となるべしと、大評判をとりてより以來、寶曆迄こゝに四十年、工夫を凝らして人形の耳を働かしめ、眉を動かして、其服裝に留意して巧に其人形にうつらしめ、人形を人形と思はざらしめしものは、實に文三郎の力なりき。其子文吾(二代目文三郎)又父につぎて當時に名あり。父三郎兵衛より父子三代竹本座に屬して其功著しく、座本より頭取役を命じたる程なりしに、其勢の猛なるに従ひ、漸く文三郎は竹本座に對して謀反を企つるに至れり。

文三郎又冠子といふ。寶曆元年戀女房染分手綱にはしめて筆を執り、當世の世話をまぜたる續淨瑠璃に世の取沙汰一方ならざりしより以來、只管作に執心し、次きて名筆傾城鑑、伊達錦五十四郡、愛護若名歌勝鬪を合作してより

は、身は人形の達人にして作者としても世に立たるゝを悟り、同志を語らひ新に芝居を建んことを謀れり。座本竹田近江人を以て和解を試みて果たさず。吉田文三郎、文吾等の吉田一派、相率て竹本座を退くに至れり。これ實に寶曆九年の事なりき。文三郎に、金主ありて太鼓櫓幕まさに人の目を奪はんとせしに、又其間に人ありて和談を遂げ、文三郎は去りて京都の芝居を勤め、文吾は祖父の名を襲ひて竹本三郎兵衛と改めて出勤し、一先落着せりといへども、其折合は到底圓滑には至らざりしか。十一年三郎兵衛更に文三郎と改めて江戸に下れり。

鐘掛松は此年の事なりき。座本近江比年の大入に榮華を極めて市中の貴人富家と交り結び、十一年十二月年忘れ

五千兩金借待

の爲めにとて衆人を招き、一夜に四季の體を庭に構へ、其行動人の目をそばむるに至りしかば、官の捕ふる處となりて入牢し、市中は五千兩の御用金を命ぜられ一時甚だ物騒がしく、當時興行の外題を五千兩金借待と稱したりき。程なく事は濟みたりといふ。

山、上りつくしては又下らざるを得ず。亢龍の悔は萬事に免れざる處なり。さしも全盛の竹本座も漸く衰運に向はんとせり。十二年安達原を興行し、次ぎて相撲に習ひ東西二座の當り淨瑠璃を隔日に興行して、所謂御前懸り淨瑠璃相撲を興行せしも、入りを見ること難く一座悉く江戸に下り。京の竹本座一連代りて大阪に興行したるも、又散々の不入にして煌たる満月こゝに其四分を缺く。

豊竹座又然り。寶曆の前半は其全盛期とも稱すべくして、後半は實に沈滞を極め、僅かに入をとりたるは十年の祇園女御九重錦に過ぎざるのみ。加ふるに十三年類焼し、一座兩分して京堺に向ひ、次で再ひ類焼して愈々窮境に陥りぬ。されども當時の沈滞は已往盛時に比しての衰勢のみ。年來の餘勢なほ悔るべからざるものあり。芝居の普請には進物夥しく、板行して市中に知らする程なりきといふ。未だ人氣の多かりしを知るに足るべし。

第四章 操漸衰期

明和(八)―安永(九)―天明(八)―寛政(三)
―享和(三)―文化

第一節 大坂の概況

回顧すれば近松翁浪花に下りてよりこゝに凡九十年、流行既に久しと謂つべし。出雲、宗輔、千四、太郎兵衛等出で、趣向に趣向を重ね、其作次第に奇に落ち曲に過ぎ、今は又愈、出で、愈、新奇ならしむる事能はず、吉田文三郎等も既に人形の巧を畫し果して、又更に人を驚かさん事難きに至りては、竹豊の二座何れも衰運の途につきぬ。

寶曆の末、竹本座相率ゐて江戸に下りしが、明和元年十一月に歸坂し、江戸土産として江戸櫻愛敬會我を興行し、次ぎて忠臣藏を繰返して僅かに餘勢を保ち、明和二年蘭奢待新田系圖を出せしも、これ又不入にして七月にはざこば、政太夫も死し、淨瑠璃は新古を問はず何れも不入を極

本朝廿四孝

め、有爲の太夫は去りて江戸に下れり。東西二座太夫を交替すれども又左せるきゝめもなく、今は危からんとして、近松半二等の手に本朝廿四孝の作らるゝありて、辛くも頽勢を挽回するを得たり、其初日は明和三年正月十四日なりき。島太夫、染太夫、鐘太夫等各精勵して其持場にかゝり、四段目に引割御殿のせり上を工夫して観客に大道具立を示し、漸くにして近年に稀なる盛況を致せり。次ぎて十月太平記忠臣講釋を出すや、忠臣蔵にもまされりどの好評を博して、再び全盛期の昔にかへらんとしたれども、これも一時の事なりき。之につぎて後世歌舞伎に入りて今もなほ演ぜらるゝ、關取千兩幟を出せしも、又散々の不入にして如何ともなし難く、京の竹本座と交替するに至

太平記忠臣講釋

りぬ。

かくて京の一連浪花に下り、並木正三の石川五右衛門一代噺を出したりしに、此度も不評判いはん方なく、相帥ゐて逃げ去りぬ。次で半二、松洛等の三日太平記を出せども更にかひなく、遂に貞享二年以來連綿として八十三年を経たる竹本座も、一たび退轉するの非運に陥りて、跡は山下八百藏が歌舞伎芝居の占領する處となれり。

竹本座退轉

豊竹座に至りては更に衰へたること甚し。明和元年九月豊竹越前少椽八十四歳にして世を辭せし頃より後には、到底寶曆の榮華は夢にもし難き事となりけり。

明和元年十月、越前少椽追善として大佛殿万代礎を増補して、嬢景清八島日記を興行し、二年七月内助手柄淵を興

豊竹座退轉

行したるを以て最後となし、同年八月三十日、遂に豊竹若太夫の昔より相續したりし豊竹座も、退轉して朝太鼓人の朝いを諫むる事も絶えたり。

北堀江豊竹座

こゝに豊竹此吉奮て座本となりて、豊竹此太夫と謀り、菅專助を作者として、大阪北堀江市の側に一座を設けしは、明和三年の事なりき。豊竹應律、中村阿契、若竹笛躬等又此座の爲めに筆をとりて、大入大當一世を傾けたる事はあらずといへども、染模様妹脊門松に興行をはじめてより、明和、安永、以降寛政九年迄凡四十年を持續せり。其内傳ふべきものとしては、明和七年の義經腰越狀、安永二年の攝州合邦辻、五年の桂川連理柵をはじめとし、寛政元年の木下蔭狹間合戦、及び六年の日本賢女鑑とす。狹間合戦の盛

十返舎一九の作

んなりし事及びその屢、繰返し興行せられたる事、義經千本櫻、平假名盛衰記に比すべく、優に在來興行中の第一流に位す。殊に珍らしきは十返舎一九が近松余七といふ名の下に、若竹笛躬等と合作したりし事なりけり。日本賢女鑑亦然り、盛なること寧ろ狹間合戦にまさりぬ。近松柳及ひ近松松輔の作する處にして、祇園祭禮信仰記、本朝廿四孝と其列を同じうす。北堀江座興行中の白眉たり。其他此座の興行に係るもの三十餘番を數ふれども、多くは古淨瑠璃の改作にして、記臆すべきは前に擧げたるの外、寛政四年の三拾石トシノ石船始ふねのはじめ、其他の一二に過ぎず。然れどもよく衰運に向へる豊竹座より出で、爾後四十年の興行を繼續したる事に至りては、頗る留意すべき、價值を存するなり。

竹豊二座再興

妹脊山婦女庭訓

此堀江座の起りたる翌年の事なりき。即ち明和四年正月三日豊竹座再興せられて並木永輔淺田一鳥等の作れる星兜弓勢鑑を興行し。竹本座も亦一たび歌舞伎に譲りたりと雖も忽ち再興し、明和八年の妹脊山婦女庭訓興行に生氣を回復してより、なほ三四十年を維持せり。竹本座の再興よりして、庭訓の出づる迄の状況は、饗庭篁村氏のかつて早稻田文學に掲げられたるものありて頗る詳し。其一部を轉載して、如何に當時の沈滞衰微を極めしにも係はず、庭訓の世に容れられしかを明めんとす。

竹本座一たび退轉して其跡座は山下八百藏が歌舞伎芝居となりぬ。されど其歌舞伎狂言も思はしからず、二の替りにて落城しぬ。此の地の名物は操淨瑠璃

なり。是非に人形座を再興せんと骨折る者ありて、座本を近松門左衛門(無形の人)とし、淨瑠璃外題も門左衛門作の傾城阿波の鳴門とし、新作を出したれども一向に人足つかず、續いておはつ徳兵衛を書き直し、讀賣三巴として出したれども是また不入にて、中日迄もなく潰れたり。此座は竹本の名義ありてこそ人氣もあるなれ。今なき近松門左衛門の名など出せばこそ、幽霊座などの浮名は立つなれ。ことに阿波鳴門も外題六字、これも四字なるは陰の數にして縁起よからずなど、鴉士屢、名を更ふるの舊格にて、竹本座再興と號して初櫓操目録といふ外題にて、あれこれ當り場のみを出したれど、三日目にて閉場したり。これ

は必竟、竹本豊竹と二座ありて互に客を分つ故、互に不入のみ續くなり、策士奔走、其比同じく衰微を極めし豊竹座と交渉し、兩座打込みにて豊竹万三を名義座本とし、明和六年八月殿造千丈嶽といふを出したるも、これもまた散々の不入。あはれ豊竹座の方は分離して後、ほどく廢滅の形とはなりにけり。兩座かくなりては、これによりて衣食する人形遣、道具方、作者、太夫何れも如何ともすべからず。こゝに於て又竹本座を再興し、竹田新松を座本とし、兩三回は不入に拘はらず、一座必死に打ちたれど、頼勢如何ともしがたし。こゝに一名策を案出したるものありて、もと此座は吉田文三郎の人形によりて見物をひきたる

なり。一旦、座本と不和に及び、先年他國したれども、彼も故郷を思はぬ事はあるべからず。老たれども吉田冠子、又一花を咲かすならむと、終に人を以て文三郎を江戸より呼び戻しぬ。文三郎は江戸にありて、福内鬼外の作、神靈矢口渡あたりで稍色めきし時なれど、江戸の人氣は左迄にあらず、大坂人はさぞ我を待つらむ、ことに父子三代勤め續きて、竹本座の興廢に係る事なればと、江戸は矢口をあたり仕舞にして、明和七年夏大坂へ歸り口上看板いかめしく出し、江戸にて行はれたる矢口渡を出したれど、是すら左のみ評判なく、日數も打たで終りけり。此上は手段なし、愈廢座と決したるを、半二、一生の智慧をふるひ、此妹脊山

の作を話し、矢口の時にはじめて出座しお船を語りて大に人氣をとりたる春太夫に定高、當時名人の聞えある染太夫に大判事といふに、一座手を打ちて感心し、明和八年正月これを出したる處、四五年の不入を一時に取かへしたる大入。かくて竹本座は旗色をなほし、これより數十年の榮は保ちしなり。されば此作は半二一代の手柄のみにあらず、竹本座再興の獨參湯ともいふべきなり。

近松半二
妹脊山はまことに半二の名作にして、新作淨瑠璃の殿とも稱せらるゝものなり。今半二につきて考ふるに、彼の巢林子を大聖に比して出雲を亞聖となし、半二を大賢と品評したるが如きは、若し二百有餘名の淨瑠璃作者中より

三人を抽んでんには、まさに以上の三人を撰ばざるべからず。されど海音といひ、宗輔といひ、松洛、文耕堂等は何れも半二と相去る事遠きものにはあらざるなり。巢林子の事は今更に辯を費すの要なく、出雲の作る處最も多く歌舞伎に入りて、今なほ繰返へさるゝを見て、其秀作多かりしを認むるに足るべく、半二又衰運を翻へして再ひ盛んならしめたる者にして、彼の始むるは易く守るは難き、其難きに當りてよく支えたるものなり、大賢の地位に据えん事、余輩固より異論を抱かずといへども、なほ擧ぐべきに海音あり、宗輔あり。宗輔は豊竹座の盛時に逢遭して、至極順境にありければ、半二の如くに認められずと雖も、其作を見るに、舞臺面の大にしてよく變化と統一との妙

を兼ねたること出雲に接し、操に上して巧に支吾、舐觸なからしめたるもの、又容易に企及しうべきにあらず。半二の擧げられて宗輔等の逸したるは、順逆其地位の異りたるに由るか。どもあれ、半二は淨瑠璃作者界の英雄として擧ぐべきもの。其餘りに奇に走りたるは弊なれど、數百の作ある後にありては、これ又不止得事たるべきのみ。

近松半二は穂積以貫の子なり。半二を以て近松翁に學びたりと唱ふるものありといへども、巢林子の歿時享保と、半二の歿時天明とは六十年を隔離せるを以てすれば、其説の從ふべきにあらざるや論なし。半二の師は、竹田外記たりし事決して疑ふべきにあらざるなり、半二の初作は竹田外記と共に作れる寶曆元年の役行者大峰櫻にして、

近松半二歿

門人近松半二と署名せり。其後寶曆年間絶えず筆を執れりと雖も、多くは吉田冠子、中村阿契、三好松洛、竹田小出雲等と合作したるものにして、全く自身の筆のみに成りたるものはあらざるなり。されど明和に入りてより、廿四考といひ、忠臣講釋といひ、何れも半二の力其七分を占む。殊に妹脊山の如きは、全く半二一人に成れりといはんも、敢て不可なきに似たり。庭訓以後、竹本座の當り淨瑠璃として擧ぐべきは、安永九年の新版歌祭文及び天明元年の時代織室町錦繡の類に過ぎずして、此二者は全く半二一人に成れり。天明二年半二は病みて浪花に歿す。先に余は難波土産を引きて、巢林子が執筆の用意を説けり。今又西澤一鳳が言狂作書によりて、半二が言を記せん

とす。巢林子の如きは學識豊富にしてしかも通俗を心に期したるもの、半二の如きは其識なく前代の例にのみ鑑みて筆を走らし、時流に投じて以て一時を過したりと稱せんも強ち酷にはあらざるべし。實にや巢林子時代の花實兼備も、出雲時代となりては花うつろひて實のみ残り。人は半二の時を稱して花の時代なりといふ、花か、趣向の奇を弄したる處、曲に過ぎたる處、花といはゞ花なるべし。言狂作書に曰く、

或偏屈者近松半二に逢て、淨瑠璃の作者は如何しなばならるゝ事ぞ。又文句の内、不分明の事、且古語古實の謬を正して難問す。半二が曰く、堂上の事を知らば有職者となるべく、弓箭の古實を知らば軍學者と成

立春姫小松
興行の模様

べし。佛教を覺悟せば大和尚と成べく、聖經記典を記し、臆せば直ちに博識の儒者と成べし。菅公の事、楠正成が事も丸のみに似つこらしく書て、聞た程の語を奥深げにつばなかし、和歌管絃より何一つ正しく覺えたる事なく、聞取法問、耳學問、根氣をつめて學ぶ事の出來ぬ、自情落者、すなはち作者となるなりと答へしかば、口をつぐみて退きぬ。

と、巢林子の言と相比しては如何ぞや。半二既に然り、其他の作者は推して知るべきのみ。

安永九年の立春姫小松(半二作)の如きも、當り淨瑠璃として傳へらるれども、其興行の引立ざりし事、延享の當時に比しては霄壤の差ありと謂つへし。乞ふ諸事聞書往來の

語る處を聞け。

我天明の頃、竹本芝居かれゝなるを漸く再建し、
姫小松子の日遊を立春姫小松と増補し、今の鹽屋政
太夫三段目にて勤めしが、操好の我なれば、朝より見
物に参りしに、甚だ不入とはいひながら、大序の人形、
人形立の短きのにさし、足は折わけ掛臺といふもの
に載せ、人形の首の働きはせんにて、とめ舞臺には、人
形遣一人も出でず、人形詞の時は、十二三の前髪之を
介しやく人といふ、後よりゆすぶる故、ものいふ様に
少しの見物はおもふか知らねど、やはりからくりの
方がましなり、右大序を動むる太夫、秘術を盡して語
りけるに、場には少々見物もあれど、舞臺には一人も

なし。みすの合よりこれを見て、役場仕舞へば大に怒
り、如何に我々が様の太夫じやとて、心を盡し節を附
け勤め居るに、大序の人形、一人も樂屋より出でず、皆
々竹の筒にさし、詞の時はうしろより、かいしやく人
来てゆすぶり廻る、あれでも事がすむか、くわつたり
びしよりはおどりなりと大に怒れど、尤もなれば詞
を出すものなし。

世は既に操を飽きたりしか、興行者の意氣込何ぞ夫れ薄
きや。昔管原傳授手習鑑の興行には、上下五十人何れも心
身を清めて精勵したりしに比して、實に其懸隔の甚しき
に驚かざるを得ず。

半二既に没せり、司馬芝叟、梅野下風、若竹笛躬等筆をどれ